# 〈紐帯としての日本語〉

# 報告集の刊行に際して

野本京子(1)

ブラジル調査報告

ブラジルの日系人・日本人・日本語人に関する調査

武田千香 / キタハラ・タカノ・サトミ (6)

北米調查報告

詩歌と戦争の時代を考える

――コーネル大学、トロント大学への出張報告にかえて

中野敏男 (15)

パラオ調査報告

パラオにおける日本語の使用状況についての調査

河路由佳 (19)

インドネシア調査報告

インドネシアの新興産業都市における日本語・日本コミュニティー

――首都ジャカルタ近郊チカラン市のケース――

降幡正志 (26)

台湾調査報告

台湾在住の日台国際結婚家庭における日本語意識:世代間の相違を中心に

**谷口龍子** (34)

北米調查報告

戦後北米の日系アメリカ人の経験

友常勉 (41)

韓国調査報告

「在日」留学生を中心としたソウル在住日本語話者のコミュニティ

前田達朗 (53)

奄美調查報告

日本統治期台湾に居住経験を持つ奄美出身者とそのことばについて

高嶋朋子 (57)

ドミニカ共和国調査報告

ドミニカ共和国における日系人の日本語使用の実態について

**窪田暁** (62)

インド調査報告

デリーにおける日本語学習者の実態に関する予備的調査

宮本隆史 (66)

2011-2013 年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)) 研究成果報告書 〈紐帯としての日本語〉日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」の生活言語誌研究 課題番号:23310176 研究代表者:野本京子

## 報告集の刊行に際して

東京外国語大学国際日本研究センター センター長 野本京子

#### 1. はじめに

世界を席巻するグローバル化のうねりは日本語・日本研究の教育及び研究環境にも大きな影響を及ぼし、新たなパラダイムの構築を迫っている。

本報告集は科学研究費補助金 (基盤研究 (B))「〈紐帯としての日本語〉日本人社会、日系コミュニティ、『日本語人』の生活言語誌的研究」(平成 23~25 年度)参加者による 3 年間にわたる調査・研究の概要を取りまとめたものである。このプロジェクトの問題設定や方針については後述するが、まず日本国内での「日本語」や日本研究をめぐる変化を確認してみたい。

日本における日本語・日本研究は大きな時代の変化のなかで、どのように自己革新をしようと模索してきたのだろうか。2000年代に入ると、日本の大学で「国際日本学」や「国際日本研究」と命名した組織の設立が目立つようになってきた。これに先立つ動向として、1987年5月、大学共同利用機関として京都に国際日本文化研究センターが設立されたことは周知の通りである。

2000 年代に入ると個々の大学においても「国際日本学」「国際日本研究」を標榜する付設機関を設立する事例が目立つようになってくる。例えば現在、活発な事業を展開している法政大学国際日本研究所は2002 年に設立されている。また同大学では大学院国際日本学インスティテュート(修士課程・博士課程)を2003 年度に開設している。このように大学院や学部でも、「国際日本学」の名称をもつ事例が増えてきたのである。例えば、お茶の水女子大学では1999年の大学院の改組にともない、後期課程に国際日本学専攻が誕生している。また筑波大学では2008年、博士後期課程(人文社会科学研究科)に「国際日本研究専攻」が開設された。比較的新しいこの筑波大学の専攻は、「国際比較研究領域」「国際交流領域」「日本語教育領域」の3領域から成り、受講生に対しては、人文社会科学研究科の他の専攻や他の研究科の科目の履修を薦めている。広い視野を持ち、学際的・総合的日本研究を目指していることは明らかである。

このような大学院レベルだけではなく、2009年4月には明治大学に国際日本学部が開設され、2012年4月には大学院に国際日本学研究科(修士課程)も設立されるに至った。同大学国際日本学部は、「明治大学全体の教育の国際化を牽引する役割を期待されて出発した」とされる。

以下ではまず、これらの学部・大学院がどのような理念と背景をもって設立されたのかについて、その背景を概観したい。そのうえで、2009年4月に東京外国語大学が設立した国際日本研究センターがどのような理念を掲げ、この3年の間にどのような活動を行って

きたのかについて報告する。センターの活動について取りあげる理由は、この科研プロジェクトの参加者の多くがこの国際日本研究センターに関わっており、センターの目指す方向性とプロジェクトが共振する点があるからである。

#### 2. 日本語・日本研究の潮流

日本の諸大学において「国語・国文学」という名称を有する専攻(学科や学郡)が「日本語・日本文学」「日本語・日本文化」という名称に変更される事例が多くなっていったことは周知の通りである。1992年度には国語学・国文学系が60数%であったのに対し、その10年後の2002年には日本語学・日本文学系が70%を超えるに至っている。これが日本で学ぶ留学生の増加(2003年に10万人を超える)といった状況と密接不可分であったことはいうまでもない」。長い歴史を有する国語学会がさまざまな議論を重ねた後、創立60周年を機に、2004年に日本語学会へと名前を改めたことは記憶に新しい。

私が東京外国語大学に着任したのは 1988 年 4 月である。日本語学科は 1985 年に日本人学生と留学生がともに学ぶ学科 (1 学年留学生 30 人、日本人学生 15 人)として発足した。ただし、留学生だけを対象とする 4 年生の特設日本語学科は 1968 年に誕生している(留学生別科は 1954 年設置)。留学生・日本人学生の共学体制となり、「特設」がとれて外国語学部日本語学科という名称になったのは 1985 年のことであった。私の着任当時、学内でも日本人学生は他学科の学生から、しばしば「なぜ日本人なのに日本語を学ぶのか」という疑問を投げかけられたという。これはいまだに、問われることもあるというが、現在の日本においては、世界の諸言語・諸文化のなかに日本語・日本文化を位置づけ、教育・研究するというスタンスは(少なくても学界においては)ひろく共有されるようになったといえよう。東京外国語大学において、「多言語・多文化教育センター」が立ちあがったのは 2006年のことである。

なお 1980 年代半ばからは、日本においても国際的な労働力移動が顕著になり、いわゆる「外国人労働者問題」が社会問題になる。日本において学問の分野で、「国民国家内部の多様な社会集団と、国民国家を超える社会のつながりと変動とを社会学的に分析しようとする学問的な試み」として、「国際社会学」というアプローチが提唱されたのは 1980 年代半ばであったという<sup>2</sup>。

このような動向に照らしてみると、京都の国際日本文化研究センターの設立が 1987 年であったことは、きわめて興味深い。人・モノ・資本の移動というグローバル化の波が日本社会に大きな影響を与え、それにともない学問領域にも新たな視点がもたらされたのである。日本語教育・日本研究もこのような大きな流れのなかでとらえられよう。21 世紀に入

<sup>&</sup>lt;sup>1</sup> 2011 年 5 月現在の留学生数は約 13 万 8 千人 (日本学生支援機構)。2008 年に日本政府は「グローバル戦略」の一環として 2020 年を目途に留学生受入れ 30 万人を目指すという「留学生 30 万人計画」を策定している。

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> 小ヶ谷千穂(2009)「『外国籍住民』から見る日本—国際社会学からのアプローチ」横浜国立大学留学生センター編『国際日本学入門 トランスナショナルへの 12 章』成文社

ると、日本においても「外国人労働者問題」から定住外国人市民問題へと関心が移り、多言語多文化化する社会のなかで日本語・日本文化について再考しようという動きが加速するようになる。「国際日本研究」や「国際日本学」という名称をもった教育研究機関が誕生するのは、このような状況を背景としていたのである³。以下では、2009年4月に設立された東京外国語大学国際日本研究センターの事例を取りあげ、その理念や活動状況について紹介したい。

#### 3. 東京外国語大学国際日本研究センターの活動

「国内外における日本語学習者の多様化に対応した日本語教育・研究の効果的かつ総合的な推進に寄与する」ことを目標にする東京外国語大学国際日本研究センターの背景に、上記のような大きな流れが背景にあったことは間違いない。しかしながら当初は、具体的に何を目指すのか、どのような部門を設け、誰がそれを担っていくのかについては「走りながら考える」といったものであった。実質的に組織が整い、活動を開始したのは半年後の2009年10月からである。日本語教育を核とするにせよ、言語と密接不可分な文化や歴史、そして社会に関する領域(研究分野)をどのように組み込んでいくのか、また、センターは基本的には研究機関であるが、その成果をどのように教育に還元していくのか等、さまざまな難題を抱えて出発したのである。

とはいえ、本センターが、(1)日本語教育の方法や日本の文化・社会に関する研究分野にかかわるテーマについて調査研究し、その成果を教育面にも反映し、ひろく社会に還元していくこと、(2)地域研究としての学際的日本研究はもちろん、日本語と「日本学」(日本研究)を架橋するインターディシプリンを追求するということは、センターの教員間で共有されていく。

東京外国語大学は当時、日本語専攻を含む 26 専攻語 (現在は 27 専攻語)を有し、また、言語関係だけではなく文学や思想ならびに歴史・文化、社会学や経済学といった専門を有する教員によって構成されている。1年次から2年次は各専攻語を集中的に学ぶと同時に、その国・地域の歴史や文化を学ぶという「地域研究」を重視している。学生は3年次に進級する際に、言語情報・総合文化・地域国際という3コースから進路を選択することになる4。このように多くの専攻語教育・地域研究教育体制を採り、同時に多くの留学生が学ぶ東京外国語大学に設立される「国際日本研究センター」の果たすべき役割をつよく意識しつつ、活動を開始したのである。

本センターはこのような目標にそって以下の五部門によって構成されており、現在は専

<sup>&</sup>lt;sup>3</sup> 近年のキイワードとしては、「異文化コミュニケーション」「異文化理解力」等があげられる。一例をあげてみると、立教大学異文化コミュニケーション学部では指針として「複言語主義」、つまり「複眼的な思考と『日本語+英語+1』の複数言語の運用能力で多文化共生社会をリード」することをあげている。

<sup>4 2012</sup> 年 4 月から外国語学部は、言語文化学部と国際社会学部の二学部となった。

任教員 3 人と兼任教員 21 人、さらに事務局を担う専門スタッフ 3 人(うち 2 人は補助スタッフ)によって担われている。

- ① 国際日本語教育部門 教員5名(うち専任1名)(日本語教育学、教育工学) 〈国内外の日本語教育研究機関における日本語教育の現状の調査・分析に基づく日本語の総合的な教育方法の開発・構築〉
- ② 対照日本語部門 教員 5 名 (日本語、中国語、スペイン語、ドイツ語) 〈日本語教育が実施されている海外諸地域の諸言語と日本語との対照研究推進と教材開発〉
- ③ 社会言語部門 教員5名(うち専任1名)(日本語学、日本語教育史、インドネシア語学、社会言語学)

(国内外で使用される日本語の多様性を社会言語学的に調査・分析し、日本語の動態的な研究を推進)

④ 比較日本文化部門 教員 4 名 (歴史社会学・社会思想史、日本近現代史、社会教育学、 植民地文学・文化)

〈国際的な視点からの日本文化ならびに日本社会の共同研究を推進し、「日本語」を核とする総合的な日本研究体制を整備〉

⑤ 国際連携推進部門 教員 5 名 (うち専任 1 名) (西アジア史、日本思想史・文化史、ドイツ文学・思想、異文化間教育)

(海外諸機関及び研究・教育者間の情報交換と人的交流の促進(ネットワーク構築)) 注 比較日本文化部門と国際連携推進部門は、二部門合同で活動中である。

構成を見ると明らかであるが、「日本研究」という名称はついているものの、専門領域は言語および地域とも多様である。つまり東京外国語大学の特性を生かし、言語(日本語)を核としつつも、言語が地域研究(文学・文化・歴史等)と密接不可分であることをつよく意識して出発したといえる。

#### 4. 科研プロジェクトの概要

科研プロジェクト「〈紐帯としての日本語〉日本人社会、日系コミュニティ、『日本語人』の生活言語誌的研究」は、上記の国際日本研究センターの活動指針も意識しつつ、出発した。メンバー構成は研究代表者を野本が務め、分担者8名、研究協力者3名である。

科研プロジェクトのテーマ設定に際しては、日本語と日本研究とを架橋する分野であることに加え、参加者の専門性とフィールドが、日本語教育学、社会言語学、歴史学、歴史社会学、日本思想史・文化史、ブラジル文学、人類学といったように多様であることを最大限に活かすことが目指された。

本研究プロジェクトは、おもに海外で日本語が存在する国・地域に共通する指標を「紐帯としての日本語」に求め、その集団の拠って立つ由来の違いから分類した三つのグルー

プにおける日本語と「日本文化」(具体的には音楽やスポーツ、宗教や演劇等のほか生活習慣や規律も含む)の役割の調査研究を、生活言語と生活誌の調査と各グループの比較を通して行なおうとしたものである。三つのグループとは、各国・地域における「日本人社会」、「日系コミュニティ」、「日本語人」である。

調査地域はブラジル、パラオ、インドネシア、インド、北米、台湾、韓国、ドミニカ、 奄美である。奄美の調査研究対象は日本統治期の台湾に居住経験をもつ奄美出身者である。 日本「内地」の周縁である奄美出身者を対象に、台湾という「外地」に居住した経験者の ことばによる紐帯がどのようなものであったかを明らかにすることは、本プロジェクトの テーマをより歴史的・構造的に把握することにつながったといえよう。

なお、各地におもむく際には、調査後の比較検討のために、「生活言語調査」に際してのアンケート項目や聞き取りの調査項目を共有するようにした。もちろん、各研究者の専門性や問題関心もあり、本報告集に所収されたものは、それぞれ個性的である。詳しい調査・研究内容は報告集をぜひお読みいただきたい。各報告を読むと、「日系社会」の多様性のほか、継承言語の問題や世代間での意識差、歴史性や地域性に基づく差違、にもかかわらず共通点などが浮かびあがってくる。そして各地で生きた、そして生き続けている人々の肉声が聞こえてくるように思う。調査に基づく研究成果は論文等に結実されており、関心を持たれた方はそちらもご一読いただければ幸いである。

#### 5. おわりに

本科研による最後の活動は、2014年3月7日に開催された公開研究会「紐帯としての日本語~『日本』を離れた日本語と日本語コミュニティ」であった。本科研プロジェクトの研究協力者キタハラ・タカノ・サトミ氏(リオデジャネイロ州立大学)を講師としてお迎えし、ましこ・ひでのり氏(中京大学)にコメンテーターをお願いした。研究会はコメンテーターおよび報告集執筆者による質疑応答等、3年間の調査研究を踏まえ、今後の研究への展望を持つうえでよい機会となった。

「日本」、「日本語」、そして〈紐帯としての日本語〉のあり方が自明なものではないことは、本報告集からも明らかであろう。「国際日本学」とは、学際的(インターディシプリン)であると同時に、国際的に追及されるべき学問領域であることは間違いなく、このことは本科研プロジェクトを通じて実感したことでもある。

東京外国語大学では多くの学生が留学体験をもつが、戻ってきてから「自国のことに無知であった」ことを痛感したという。さらに学生たちのなかには、留学先の日本人社会、さらに多様な日本語を話す「日本語人」との出会いを体験して戻ってくる者も少なからず存在する。今後も、「日本(日本語・日本文化)とは何か」を自明のものとしてではなく、意識化して考える手がかりを得られるような共同研究を目指していきたい。それは国際日本研究センター教員を中核とする本科研プロジェクトの目指したものでもある。

# ブラジル調査報告

## ブラジルの日系人・日本人・日本語人に関する調査

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 武田千香 リオ・デ・ジャネイロ州立大学 キタハラ・タカノ・サトミ

# I. ブラジル・リオデジャネイロの日系社会調査

#### (1) 概要

- 期間:2011年8月7日~8月25日(滞在期間:8月8日~8月23日)
- ◆ 場所:リオデジャネイロ市
- 調査内容
  - 一聞き取り
  - 日本語教育従事者
  - 日系団体関係者
  - 日本文化活動従事者
  - 在外公館勤務者
  - その他イベント参加

#### (2) リオデジャネイロの日系社会について

- リオデジャネイロの日系社会の歴史と特徴
  - 1908年6月18日以前の歴史がある。
    - 旧いところでは1880年代の「帝国サーカス団」
  - 1907 年 12 月、サント・アントニオ耕地に入植
- 20 世紀前半
  - 1915年~1916年:州内150名、首府内50名(推定)
  - 戦前は複数の商会
  - 農業より商業
    - 同化傾向が強く、現地人と結婚。
- リオデジャネイロの日系団体
  - 1948年に初の日系団体:「リオデジャネイロ・スポーツクラブ」
    - 他州の日系人が中心となって設立
    - 現在の「連盟」の前身
- リオの3日系団体
  - 「リオデジャネイロ州日伯文化体育連盟」(「連盟」) ⇒リオ州

- 「リオデジャネイロ日系協会」(「日系」) ⇒リオ市(1972年創立)
- 「日本文化協会」(「文協」) ⇒非日系が対象(1936年に前身創立)
- 「イシブラス」の存在
  - 石川島ブラジル造船所
  - 「イシブラス」=「日本」の時代も⇒日系人・日本人・日本語人の三者が協働で作った社会

#### (3) 聞き取り調査

実施概要:調査期間:2011年8月9日~8月19日

方式:聞き取り→録音→書き起こし

#### 質問項目

- ・「日本語」という紐帯がどこでどのように機能しているか?
- ・3つのコミュニティの関係について
- ・日本語・日本文化の地位はどうか。
- ・今後、日本語はどうなっていくか。どうあるべきか?

## ① 加藤玲子氏(日本語教師、日系1世)

[プロフィール]

本学卒業生。1964年卒。新聞社勤務後、1974年に渡伯。教会で日本語指導にあたったとき以来、日本語教師歴32年。日系協会、文協等で教え、現在は大学で日本語および日本語教授法の非常勤講師。

#### [特記事項]

- 日系協会は当初は日系中心で、家で日本語を話している人たちに教える日系人対象 の継承言語教育。1984、5年ごろから非日系がぽつぽつ入ってきて、日系人教 育とはいえなくなった。最近は非日系が多い。
- 83,4年にリオ連邦大の教員になった非日系ソニア二宮氏は画期的。
- 日本語を自分のアイデンティティとしているような人は、日系協会に子どもを連れてくるが、子どもは日本語を紐帯として使えるようなレベルに達しない。
- リオは日本人、日系人、日本語人がくっついている。サンパウロは別。
- とはいえリオの日系社会でも駐在員より移民の貢献度が高い。
- 日本語だけでは出世は難しい。中国語のほうが有利。日本語は落ち目。

#### ② エリーザ・マサエ・ササキ氏 (大学日本語学科教員、日系2世)

〔プロフィール〕1971年サンパウロ生まれ。家は寺(仏教)。14歳のときに日本へ単身留学。社会学博士。専門はブラジルの日系コミュニティおよび日本への就労。リオ出身の非日系ブラジル人と結婚後リオに移る。現在は大学で日本の社会、歴史、文化を教えている。

#### [特記事項]

日本語への入り口として宗教とスポーツの存在は小さくない。

- クリチーバでは日系人と日本人の関係が難しいと言うが、リオは違う。
- リオに比べてサンパウロの日系人は日本文化の代表という意識が強い。
- リオの大学の日本語学科教員がブラジル初の黒人ということは誇らしい。サンパウロでは考えられない。大学では学生の黒人の比率が高い。
- サンパウロの日系人には日本語能力への期待にプレッシャーがある。
- ブラジルでは「オリエンタル=日本人」というイメージが強い。
- リオは日系社会を通さずとも日本文化が社会に伝わる。自由。サンパウロだった らこんなに幸せじゃなかった。
- リオでは、きっかけはポップカルチャーが90%。漫画は言語理解が必要。

#### ③ 鹿田明義氏(日系団体役員、日系1世)

〔プロフィール〕東京生まれ、大学中退、1957年渡伯。1960年以来、修理工場経営。リオ へはイシブラス全盛時代に移る。日系2世と結婚。娘2人。

# [特筆事項]

- ブラジルで生活するのなら日本語は必要ない。後から振り返れば日系人だったら、 多少日本語を知っていてもいいかとは思うが、あくまでも心理的・精神的なもの
- ことばは世界の経済に支配されている。日本経済がいいときは商業価値があったが、 今は中国語のほうがいい。
- 日本語はある程度このままでいくのではないか。継承言語教育から外国人向けの言語教育はへの転換はすでに始まっている。継承言語としての日本語教育は難しいだろう。
- 今。足りないのは教師。

#### ④ 園尾彬氏(日本語学校校長、日系1世)

〔プロフィール〕1939年、北九州市出身。農業移住をした後、ハッカ製造会社、移住事業団、鉄鋼会社、大使館に勤務。その後、通訳・翻訳業に従事しながら日本語教育に携わり、1984年よりリオデジャネイロ連邦大学日本語学科教員。同年日本語学校を設立。

## [特筆事項]

- 日本からの駐在員をばかにしている。
- (3つのコミュニティは) だんだん近づいてきている。
- リオはかなり昔から日本語を外国人に教えてきた。サンパウロは遅れている。リオは継承言語教育はしてこなかった。
- 日本語は95年ごろから急降下。
- 80年代の動機は経済だったが、今はアニメ。
- 日本語教えると同時に日本文化(精神)を教えることが大切。
- 私は昔の日本人なのではなくて、外国に出てきた日本人である。
- 移民の子だとばかにするな。私はブラジル人。自分で選んだブラジル人。

### ⑤ 牧田弘行氏(日系団体役員、日系1世)

〔プロフィール〕本学OB. ブラジル在住 51年。イシブラスへ派遣され勤務。初代文化協会会長。妻は日系1世。2人の子ども(いずれもブラジル生まれ)。

#### [特記事項]

- 日本語を知らなければ日系人とはいえない。日本語がなくなったとき日系人でな くなる。
- 継承言語教育と外国語教育はすでに一体となっている。日系人にも外国人として 教えている。
- リオでのイシブラスの存在は大きい。(「イシコーラ (学校)」)
- 中国語は教えられても、中国文化は教えられていない。日本文化はブラジルでは 興味を持ってもらえる。
- リオでの日本語のプレゼンスは 10 年前ぐらいになくなった。2008 年の記念事業 は最後の盛り上がり。
- 日本語は維持してもらいたい。
- NHKが見られるようになって感慨がなくなった。

## ⑥ 蓮尾良昭氏(日本総領事館文化担当、日系1世)

〔プロフィール〕1950年生まれ。大学院でブラジル文学を学び、フルミネンセ連邦大学に留学。そのまま定住。連邦鉄道に7年間勤務。歯学部に入学するが中退。その後リオデジャネイロ連邦大学法学部ににゅうがく。87年より総領事館に勤務。リオデジャネイロ連邦大学文学部日本語学科での教歴がある。妻は非日系ブラジル人。家庭内はポルトガル語のみ。

#### [特記事項]

- リオは昔から非日系に日本語を教えてきた。
- リオは日系社会の規模が小さいから、駐在員も日系人も混在。3つのコミュニティの境界は、リオでは存在しない。
- リオでは、日系人と非日系人の意識の違いはない。日系人もどこまで日系人という意識を持っているのだろうか。
- 最近は日本語では非日系人が優秀だ。ポップカルチャーやアニメの影響が大きい。 日本語はこうしたものに支えられ、担い手は非日系人になっていくだろう。

#### ⑦ **関口ひとみ氏**(日本総領事館広報文化センター所長、日系2世)

[プロフィール] サンパウロ大学出身。

#### [特記事項]

- 今後、継承日本語教育は自然消滅すると思う。
- 日本語は今が正念場。中国は政府が力を入れている。だが日本ブランドの力は大きい。日本文化は日本語の勉強のきっかけになる。
- アニメや漫画、ゲームの力は大きいが、Kポップもあるし、中国は漫画大学を設立。このままではとられてしまうのではないか。

- ただ明るい話もある。サンパウロやパラナでは効率の小中学校に日本語が導入された。
- ブラジルの他の地域、たとえばパラ州では、1世や2世がしっかりと日本語を継承している。ブラジルは広いので日本語教育には差がある。

# ⑧ ジャネッチ・オリヴェイラ氏 (大学日本語学科教員、非日系)

〔プロフィール〕30代。2001年ごろ日本語と出合う。きっかけは12歳下の弟と妹がアニメに興味を持っていたこと。今は日本のドラマにはまっている。浜松市立高校国際学級(ポルトガル語)の教諭として1年7か月、滞日。

#### [特記事項]

- 日本語を話したくて元留学生や日本に住んでいた人とよく集う。
- リオは、日系人と日本人のコミュニティが少ないから、日本語ができる人にとってはサンパウロよりもチャンスがある。もしサンパウロだったら日本語教師にはなれなかったかも。でも、いくらうまくても日系人が好まれてうらやましいと思うこともある。
- 韓国のドラマよりも日本のほうがよくできていて面白い。
- 日本語はグローバルに興味を持たれているから、地位は多少下がっても、あまり 下がらないと思う。中国語や韓国語はブラジル人には難しすぎる。

## ⑨ ペドロ・カルヴァーリョ氏 (Jポップカルチャー研究所所長、非日系)

#### [特記事項]

- 以前、日本語は日系社会のものだと思われていたが、アニメ、漫画、ゲーム等の 人気沸騰とともにブラジルの若者たちが日本語に興味を持ち始めた。
- ブラジルはポップカルチャーファンが世界一多い国。
- ブラジル全国で年196のイベントが開催されている。
  - ① 一番多い州は、日系人がほとんどいないマラニョン州。
  - ② イベントでは、日本文化が使われ、たいていワークショップの形で日本語教 室等が開かれる。
  - ③ 年齢は若い。30歳以下、20、21歳ぐらい。そのあとは行かなくなる。 日本文化は面白い入り口。
  - ④ 年間1,750万人のJポップカルチャーの参加者がいる。
  - ⑤ イベントの入場料は安く、C,D クラス。しかし広い範囲をとらえる。
- 私のきっかけは父がゴジラを好きだったこと。
- 日本の漫画の魅力は日常が語られていること。他国のとは違う。
- 日本のやり方は、アニメを使って関連グッズを売ること。カード、ゲーム、アニメソング、関連雑誌、タイアップ賞品…。ディズニーとは違って最初から全ビジネスプランを作る。

- アニメイベントは州の奥地で頻繁に開催され、あまり子供っぽくない内容が好まれる。
- リオで、ポップカルチャーファンの中から、日本語学習者はたくさん出てくると 思う。ニーズに応えるのは公文。
- エスコーラ・ジ・サンバがコスプレの衣装の作り方をカーニバルの衣装づくりに 取り入れた。カーニバルでもコスプレの連を作ろうとしえいる。
- 今年日本で行なわれたコスプレ大会の優勝者はブラジルチーム。これが三勝目。 (全部サンパウロ)
- コスプレのプレゼンは全部日本語。
- 以前のアニメファンは男性中心だったが、最近は男女のバランスがとれている。 おそらく少女マンガがあるせい(米国にはそれがない)。
- コスプレのコンクールの審査基準は、衣装、プレゼンテーション、忠実性。日本のコスプレは劇はやらず、仮装のみ。このようなプレゼンを始めたのは欧米。劇をするから日本語ができなくてはならない。
- 日系コミュニティでも、盆踊りは伝統的な音楽ではなく、アニメソングでやると ころもある。
- 日本を紐帯とするコミュニティはすでにある。なぜなら若者はアニメ、ゲーム、コミックに興味を持ち、そこから日本語の新しい世界を発見したから。
- Kポップも勢いが強く、日本より大人向けが多いから、ブラジルでは将来性がある。
- 漫画に日本語は必要です。字幕でなく理解するため。また日本語は文化的背景理解が必要だから、翻訳だけには頼れない。

## (4) 収集資料

- 聞き取り調査録音データ
- ・ 『リオデジャネイロ州日本移民 100 年史』(リオデジャネイロ州ブラジル日本移民 1 0 0 周年祭・日伯交流年実行委員会編)

## Ⅱ. ブラジル北東部 J ポップカルチャー調査

研究課題:ブラジル北東部における J ポップカルチャーの受容

用務地: ブラジル国リオデジャネイロ、サンルイス (マラニャォン州)、フォルタレーザ (セアラ州)、ゴイアニア (ゴイアス州)

出張期間:2012年8月18日~2012年9月2日(正味10日)

## 1. 調査の概要

平成 23 年度にリオデジャネイロで「日本人社会」「日系コミュニティ」「日本語人」の 3 つのコミュニティの人々に聞き取り調査をしたところ、どの人からも共通して、今後のブ

ラジルにおける日本語のプレゼンスは、Jポップカルチャーによって支えられるだろうということが指摘された。中でも印象的だったのは、リオデジャネイロのJ-POP研究所長のペドロ・カルヴァーリョ氏のインタビューだった。その中で、ブラジルでもっともJポップカルチャーのイベント数が多いのが、日系人のほとんどいない北東部の町、サンルイスとフォルタレーザであることが知らされたのだった。

そこで、今年度は、その背景には何があるのかを探るために、その両都市の代表的なJポップのイベントの実行グループのリーダーを訪ねた。また、この二都市の日本語教育事情を併せて知るために、同地で日本語教育に従事している方々にも聞き取り調査を行なった。さらに比較の対象として、北東部ではない都市ゴイアスも訪問した。

本調査は、本研究の研究協力者であるサトミ・キタハラ教授 (リオデジャネイロ州立大学) に代わって、同大学のエリーザ・マサエ・ササキ客員講師が同行した。

## 2. 聞き取り調査について

調査対象者:聞き取り調査は、以下の方々に行なった。

- ① サンルイス
- 「マツリ」実行メンバー
  - ▶ ミゲル・ブラーガ
  - ▶ マリーザ・ホーザ・メンジス
  - ▶ クレウソン・ホベルト・コヘイア
  - ▶ アウド・フェヘイラ・レイチ・ジュニオール
  - ▶ ブレーノ・リマ
- 日本語教育関係者
  - ▶ 山田清(日伯文化協会)
- その他
  - ▶ クラウヂア・バホス (メンバー友人)
  - ▶ ソランジ・ジ・ブリット・リマ (ブレーノの母親)
  - ▶ マユミ・カワグチ(ササキ氏の友人、日系人)
- ② フォルタレーザ
- SANA実行グループリーダー
  - イゴール・ルセーナ
- 日本語教育関係者
  - ▶ ラウラ・テイ・イワカミ (セアラ州立大学教授)
- その他
  - ▶ アビマエル・マルケス (セアラ州立大学大学院生)
- ③ ゴイアス
- マリア・クリスチーナ・ヴィドッチ・ブランコ・タヘガ (ゴイアス連邦大学教

#### 3. 調査結果要旨

- 1. 北東部の2つのビッグ・Jポップ・イベント
- (1) サンルイス最大の J ポップイベント「マツリ」
  - ブレーノ・リマが創始。身体に障害があったが、日本語を習い始め、字を書く 練習を通してかなり回復。家族の支えでイベントを実現。現在はオンラインショップも経営。
  - ・ ブレーノが始めたイベントをミゲル・ブラーガが引き継ぎ、マーケティングの 手法を取り入れて、2006年に第一回「マツリ」を開催。現在は隔年で実施、2010年の第四回は1千人、2012年の第五回は2000人を上回る人が訪れるサンルイスの代表的なJポップイベントに。
  - 順調な発展を遂げているが、悩みの種は公的支援を受けられないこと。
- (2) 北東部最大/ブラジル第二位のJポップイベント「SANA」
  - 2001 年に開始。毎年開催で、今年は 12 回め。やはり最初は友人同士の集まり。
  - 第1回:220名、第2回:700名。この好反応に本腰を入れる決意。第3回よりマーケティングの手法を取り入れる。以後、5000人(第4回)→12,000人(第5回)→20,000人(第6回)→32,000人(第7回)→41,000人(第8回)→50,000人(第9回)。
  - ◆ 成功の秘訣
    - ▶ 「日本ブラジル文化基金」の創設
    - ▶ 脱オタクを図ったこと(ポップカルチャー以外の日本文化も)
    - ▶ 職能開発教育の場として活用したこと →公的支援の獲得へ
    - ▶ 政治力(父親が連邦議員で叔父はフォルタレーザ市の副市長
    - ▶ コスモポリタン化:日本の枠にとらわれない。
  - ※「マツリ」と「SANA」
  - ・「SANAはあまりに大きくなりすぎて主要なことを忘れている。つまり底辺、 人間的なもの、ファンを忘れている」(ミゲル)

#### 2. ブラジルにおける J ポップカルチャー人気

- (1)「違う」ものを求めて:「オータナティブな文化」
  - なぜ「Jポップカルチャーが好きなのか」という問いに、「多くの人の口をついて出てくるのが「違っているから」。
  - 好みの対極にはブラジルの文化? Jポップカルチャーを好きな人には、ブラジルの文化が好きになれない人が多い印象がある。

- ・ 山田清のコメント「それは全体から見れば1%にも満たない」「ブラジルのこの社会、文化に満足できない連中」「既成の文化というものに満足できない」
- (2) なぜ北東部か?
  - キーパーソンの存在が大きい
    - オタクではないが、自分もかつてはオタクのように日本のアニメやマンガを愛した。
    - ▶ 経営的専門性に裏打ちされた経営手腕を持つ。
  - ◆ 「違う」要因が大きい
  - サンパウロの業者の利害と一致したため、サンパウロの業者がてこ入れした。
- (3) 日本語と J ポップカルチャー
  - Jポップカルチャーは、あきらかに若者たちにとっての日本語への道プラジルの日本語講座は受講生の8~9割の動機がJポップカルチャー
  - 日本語ばかりでなく日本文化への入り口
  - ◆ 「日本文化」のイメージは変わるか?
    - ➤ これまで日本は「伝統」と「モダン」の両方を併せ持った国。そおn「モダン」の部分にもう一つポップカルチャーが加わっただけ?
  - 〈紐帯〉はむしろ」ポップカルチャー?

#### 3. 収集資料

聞き取り調査録音データ

#### Ⅲ. 本調査結果の発表

〔口頭発表〕

- ・ 武田千香、「ブラジル・リオデジャネイロ調査報告」、科研「紐帯」としての日本語」 研究会、2011年12月8日、東京外国語大学.
- ・ 武田千香、「ブラジル・北東部調査報告」、科研「紐帯」としての日本語」研究会、2013 年1月24日、東京外国語大学
- ・ ササキ・マサエ・エリーザ (研究協力者)「ブラジル北東部日本ポップカルチャーフィールド調査報告」、リオデジャネイロ州立大学 第6回東洋古典文学会/第二回東洋文学全国大会、2013年5月7日.
- ・ ササキ・マサエ・エリーザ (研究協力者)「ブラジルにおける日本人移住と日本ポップ カルチャーの関係」、第 14 回ラテンアメリカ・アジア・アフリカ学会世界大会「アジ アとアフリカ: ラテンアメリカからの連携・交流・接近」、2013 年 8 月 13-17 日.

## 北米調査報告

# 詩歌と戦争の時代を考える ----コーネル大学、トロント大学への出張報告にかえて

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 中野敏男

科学研究費受給研究プロジェクト(研究課題「紐帯としての日本語」)の研究活動の一環として、2013年3月27日より4月5日までアメリカおよびカナダへ出張し、コーネル大学とトロント大学を訪問した。両大学では、当地の日本研究者および大学院生、学部学生と日本研究の現状について懇談し、日本の言語・文化および歴史に関連する当地での教育の実情について事情聴取し、今後の研究方向についても意見交換した。またその際に、市民にも公開される形で開催された拙著『詩歌と戦争』(2012年刊、NHK出版)を主題とした書評討論会において特別講演を行い、日本の文化とりわけ詩歌が、当地の日系社会、日本語教育関係者、その他の関心をもつ多くの人々にどのように受容されているかについても事情聴取した。以下は、その特別講演の内容の一部を、当日の議論を踏まえて報告の一文にまとめたものである。

#### 一 東日本大震災

## ――それは詩歌をあらためて問いに曝した

2011 年 3 月 11 日、東日本大震災のその日から二年あまりがすぎて、現在の日本においてはこの「震災後」という時代が、文化という領域において、とりわけ詩歌という営みにとっても容易ならぬ試練の時であることがいよいよはっきりしてきている。

思えば、地震と津波と原発事故による災害があまりにも苛酷な仕打ちとして被災者を襲っているとき、そのニュースの衝撃に「言葉を失っていた」多くの人々に届けられたのは、「詩の言葉」だった。「「遊ぼう」っていうと、「遊ぼう」っていう」、金子みすずのこの一節がテレビから繰り返し流されてまず知れ渡ったが、この詩は、それ自体としては震災などとの関わりから生まれた作品ではないはずだろう。それなのにこの言葉は、そのとき確かに震災に傷ついた人々の心に響く力を持っていたと見える。そればかりではない。この時には他にも多くの詩や歌が巷に流れたし、また専門のミュージシャンだけでなく、数多の人々が詩や歌をたずさえて被災地の避難所を訪れ、その詩の言葉が傷つき苦しんでいる被災者たちの心を癒して、「絆」への信頼を思い起こさせたし、勇気や希望さえももたらしている。それは、音楽や詩歌の確かな力をあらためて実感した経験だった。

ところが、そんな経験から二年あまりがすぎて、現在では、そこで喚起された人々の感情がある岐路に差しかかっていると見える。被災の当初は心優しく「がんばろう」と励ましあったはずのあの声が、一方では、今もなお震災から復興へと懸命に歩んでいる被災地

の人々の持続する努力を支えていると思われるのに、他方では「がんばろう日本」というかけ声がともすると「わたしたちの日本」にひたすら自己同一化する意識を生み、それが排外的な悪しきナショナリズムの感情にも結びついて広がっているからである。今日では、在日朝鮮人や日本に住む韓国人に「死ね」などという悪意と攻撃の言葉を声高に浴びせかけ、それが「ヘイトスピーチ」としてデモの隊列をなしたり、ネット上にも広がる気配を見せたりしている。これは、これまでになかったような感情の社会的噴出であり、なにやら息苦しく、暗い時代の予兆を思わせるような事態だと言わねばならない。

もちろん、そのような社会意識の動向には、「現代社会」に潜むそれなりの歴史的・社会的な背景や根源があって、それを直ちに詩歌の責任としてだけ論ずることは出来ない。まずは政治や経済にその「原因」を冷静に見極めておくことは大切に違いない。とはいえ、「震災後」という特別な状況の下で実際に実感したのが「詩の力」であり、その力がなお現実に動いていると認められるなら、音楽や詩歌の果たすこの時代への役割について、いまわれわれはあらためて考えなければなるまい。音楽や詩歌が時代に共振する時がまたやってきている、そんなときだからこそ、時代を動かす力としての詩歌曲の意味をしっかり考えておきたいと思うのである。

## 二 戦争の時代には詩が動員されていた

――詩歌の抒情が孕む〈危険〉を考える

そう思って歴史を顧みると、そのような「詩の力」が実際にかり出され、大いに利用されたときがあった。それが戦争の時代である。

「15 年戦争」とも言われたアジア・太平洋戦争の時代は、あらゆる文化的な営みが窒息させられた「不毛の時」と思われがちだが、実はむしろ詩や歌が人々の間で大いに行き交った時代でもあった。とりわけ日中戦争が本格化する 30 年代の後半になると、戦争に翼賛する詩歌集の出版が急速に拡大したばかりでなく、36 年にはラジオ放送番組『国民歌謡』がスタートし、41 年には大政翼賛会文化部が詩歌集の編纂とその朗読会の広範な開催に乗り出して、詩歌による戦争翼賛の形が国家的な規模で組織されるようになる。これに対して詩人たちもまた次第に積極的に応ずるようになって、41 年 12 月に日米戦争の戦端が開かれると、時の詩界はまさにこぞって「詩歌翼賛」に乗り出すことになる。43 年に軍艦建造のための募金を目的に作られた『辻詩集』には、三木露風、白鳥省吾、千家元麿など、時の名だたる詩人たちが総勢 207 名参加してそれぞれ新作を寄せている。これは目立った一例だが、ともあれ歴史的に見れば、「戦争協力」という問題において詩は決して無垢なのではなかった。

もちろん、このような詩の戦争協力という問題は、これまで決して問われなかったというわけではない。「戦後」という時代を通してみれば、それはむしろ繰り返し大きな思想的問題になってきた。とはいえこれまでこの問題は、主として戦時における「転向」の問題、言い換えると詩人の志操の事柄として問われてきたと言いうるだろう。すなわち、詩作に

おいて美や愛を表現しようとしていた詩人が、戦時の権力による強制に屈して志を曲げ、「戦争協力」という不本意な行為に手を染めてしまったという問題として論じられてきたのである。戦後初期に「文学者の戦争責任」が問われたときもそうだったし、それにやや遅れてそのように責任を問うた当の「前世代の詩人たち」の責任をさらに問題化した吉本隆明らの問いも、またそれであった。そこで問われたのは、戦争に反対するか翼賛するかを自ら選択する詩人一人ひとりの倫理なのであった。

しかし、そのように考えるべき問題の焦点を「転向」という事柄あるいは詩人の「倫理」に絞ってしまうと、それで詩作という営みに固有の問題がかえって見えなくなるということはないだろうか。個人の志操についてなら、それは詩人ならずとも同じように問題化されうるし、問題化されねばならないはずだ。そこには詩作に特別なことはない。すると、戦時の詩作において特別に問われねばならない問題とは何だったのか。

そのように考えてきて、われわれはあらためて、3.11 以降の「震災後」という特別な状況下での詩歌の経験が重要な問題の扉を一つ開く鍵でもあるということに気づかされる。この「震災後」においてわれわれが経験してきたのは、詩歌が災害に傷ついた人々の心を癒す力をもったということであり、またそれに共感する人々も広範に存在して、詩歌が時代と共振したという事態である。そして、それにより喚起された感情が、時間の経過と共にある岐路に立たされることになっているということである。問題は、詩人の志操というよりは、むしろそれを越えて働く「詩の力」なのだ。すなわち、ここで考えなければならないのは、そのようにして時代にシンクロして思いもよらぬ「力」を発揮するようになっていく詩歌の抒情の働きについてであろう。これは、詩歌に関わりを持とうとするものにとって、個人的な志操の堅持などより実ははるかにやっかいな、詩歌という営みの根源にある問題だと言わねばならない。善意の喪失ゆえにではなく、むしろ善意に敷き詰められていると見える道こそが、詩歌の抒情の力に導かれて、戦争へ続いていくということがありうるのではないか。

#### 三 もうひとつの震災後と詩情の抗争

#### ――植民地主義を徹底して清算するために

そこで、歴史に学ぶということが問われてくる。日本の近代史は、日本全体の進路を大きく左右することになった大震災の経験をもうひとつ持っており、その時の震災後は、まっすぐに戦争前の時代へと繋がってしまった。すなわち、関東大震災からアジア・太平洋戦争に至る時代がそれであり、この時代について書いた拙著『詩歌と戦争』という作品は、この時代がまた詩歌の時代でもあったことに注目している。そのように見直してみると、本書『詩歌と戦争』はかつての「震災後」を扱いながら、確かにいまの「震災後」に繋がっている。

ここではそんな『詩歌と戦争』といまの「震災後」の繋がりについて、本書刊行の後に さらに様相が進行した感情の状況に注意して、二つの点を特にお話ししたい。 一つは、いまの「震災後」に目立ってきたヘイトスピーチにおいて、その標的として主にやり玉に挙げられるのが在日朝鮮人や日本に在住する韓国人であるという点に関連している。『詩歌と戦争』では、関東大震災前後の童謡創作の隆盛という時代状況と、震災の時に発生した朝鮮人の虐殺事件との関連に触れた。すなわち、その背景で進行していた日本のアジアに向かう植民地拡張の動きと、その流れに乗りながら植民者として朝鮮や台湾へと向かった日本民衆の野心と不安が、優しい詩歌曲を求める心情に照応していたという消息についてである。それを踏まえて顧みれば、いまの「震災後」にそのようなヘイトスピーチが目立ってくるというのも、どこかでそのような政治・経済的な時代状況と関連があると見なければなるまい。ここでは現在に継続する植民地主義について詳しい分析は控えるが、そんな時代への冷静な認識が必要だという点には注意を向けておきたい。

さてもう一つは、それとも関連するが、いまの「震災後」に癒しを求めて喚起された感情が、悪しきナショナリズムの排外的な意識を内包しながら拡大しているという現象は、関東大震災後の童謡創作の隆盛時に見られた「内向する優しさ」が、戦争の時代に続く「他者の消去」という意識の限界を内包していた事情と相似しているということである。そうだとすれば、かつての「震災後」にそんな「内向する優しさ」を食い破っていくような詩情の形成が求められていたように、いまの「震災後」にもそんな詩情を巡る抗争が問われているということになるだろう。この抗争についてしっかりした認識があるならば、道は細くとも閉ざされているわけではない。その道行きには困難もあろうが、そうであればこそ歴史に学ぶことは何より大切である。

そう考えてみると、わたしの研究活動やそのささやかな成果である『詩歌と戦争』に限らず、日本の歴史と文化を問い直し研究する作業は世界のどこにあっても、いまの「震災後」に生まれている日本のこの状況と無関係にはありえないことも明らかだろう。そんなことを考えながら、連繋した研究を発展させていきたい。

## パラオ調査報告

## パラオにおける日本語の使用状況についての調査

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 河路由佳

## 1. 調査の概要

- 1-1. 第一回調査
  - ① 調査日程 2012年2月17日(金)-23日(木)
  - ② 調査内容

パラオにおける日本語使用についての予備調査を行った。

A. ベラウ国立博物館における「現代パラオ語の中の日本語起源の借用語、外来語」についての調査の結果について、また、日本時代を生きたパラオの人々のライフストーリーに関する同博物館の展示等について、意見交換、情報交換を行った。インタビュー対象者:館長 Olimpia 氏

メディアディレクター Simeon 氏

B. カトリック教会(旧「スペイン教会」)及びシニア・シティズン・センターにおいて日本時代に生を受けたお年寄りにお話をうかがった。日本語を話す人は少数であった。

インタビュー対象者: アントニナ・アントニオさん(1930年生)

Ngesengeas T. Nakamura(トシコ)さん(1934年生)

マクシーさん(1938 年生) パウリーナさん(1942 年生) ミリヤムさん(1941 年生)

- C. 日本国大使館を訪問、専門員の林直子氏よりパラオでの日本語にかかわる活動についてうかがった。日本語補習校のこどもたちによる「パラオの中の日本」と題された展示を見た。ちょうど滞在中に、大使館主催の日本映画上映会(「のど自慢」)があったので、パラオのお年寄りと一緒に参加した。
- D. 中島敦の短編「マリヤン」のモデルで日本語に大変堪能であったマリヤ・ギボンスについて調査をし、関係者に話をうかがった。

インタビュー対象者: マリヤの長男 現大酋長 (イブドゥル) ユタカ氏 (1944生)

マリヤの娘 現女大酋長 (ビルーン) グローリア氏 (1950年生)

なお、Dに関連して、帰国後、関係者へのインタビューを続行した。 戦争中、パラオ教会で牧師をしていた山本精一氏と戦後同じく牧師をしていた渡 部義和氏へのインタビューである。両者ともパラオでマリアと親交があった。

#### ③ 収集資料

Aについては以下の調査報告書をいただいた。

- \* 「パラワン日本語集(JAPALAU)」編集者: 古賀信二 JICA シニアボランティア 881 語(2008 年 8 月 20 日)
- \*「loaned Jap's words」698 語
- B、DのインタビューはIC レコーダーで録音、話題にのぼった日本語の歌の歌詞カードなどは写真で記録した。Cの展示も写真撮影した。お年寄りの間で蓄積されている日本語の歌詞ノート、メモなどをみせてもらい、写真におさめ、複数の愛唱歌を録音して持ち帰った。Dについては、博物館やグローリア氏のご自宅において、マリアの写真を撮影した。また、帰国後、マリアの留学先であった三育学院の図書館にてマリアの留学に関する資料を閲覧し情報を収集した。
- ④ 成果発表 2012年3月21日(水)報告会にて第一回調査について口頭発表の予定であったが病気のため報告書のみ届けた。

#### 1-2. 第二回調查

- ① 調査日程 2012年7月27日(金)—8月4日(土)
- ② 調査内容

パラオにおける日本語使用者への聞き取り調査を行った。日本語の習得過程や使用 状況等を中心に聞いた。

E. 日本統治時代に日本語で学校教育を受けたパラオの人への聞き取り調査。

主としてその日本語学習と戦後から現在に至る日本語使用についてうかがった。

ルムセイ (Remusei Tabelual) さん (1925 年生、女性)

(中島敦「マリヤン」のモデル、マリヤの義姉の娘)

ヤチョさん(1930年生、女性。日本時代の初等教育を受けた)

アントニナ・アントニオさん (1935年生、女性。同上)

岸川格さん(1935年生。男性。母はパラオ人、父は日本人。)

F. Eと同世代のパラオ在住の日本人への聞き取り調査。

岸川浩子さん(1937年生。上記、岸川格さんの妻で、広島出身。戦後パラオに渡

った。)

G.戦後生まれのパラオ人日本語話者への聞き取り調査。

ドナルド・ハルオさん(1960年生。男性。パラオのホテル経営者。日本留学経験 あり)

ストム (Stomu Emesiochel ) さん) (1961 年生。男性。ダイビングのガイド) ケルビン (Kelvin Rengechel) さん (1962 年生。男性。観光ガイド)

カイポ(Kaipo rechdungel)さん(1982 年生。男性。日本留学経験者。パラオ政府に勤務。)

サビーナ・アンドリューさん (1963年生。女性。パラオ高校のツーリズムの教師)

H. パラオにおける日本語指導者への聞き取り調査。

\*2001年にマリステラ小学校の校舎を借りて開校した「パラオ日本語補習学校」 久米信行さん:同校の運営委員長(日本人会)、

フジ カツオさん:同校校長

梅本雅枝さん・追立秋子さん・一戸千香さん:同校の常勤教員

\*パラオ高校(PHS)

野上陽子さん:日本語教員

\*パラオ・コミュニティー・カレッジ (PCC)

河村礼子さん:日本語教員

それぞれ校舎を見学、日本語の授業の内容や生徒の様子などをうかがった。

## ③ 収集資料

以上のうち1, 2, 3についてはビデオによる録画・録音データがある。特に太字の 方々の録音文はすべて文字起こしを行った。4については、ご本人たちからの希望で、 録音・録画は行わなかった。

④ 成果発表 2013年1月24日(水)報告会にて第二回調査について口頭発表を行った。

#### 2. 調査によってわかったこと

調査Aでは、パラオ語になっている日本語起源のことばに関する調査報告「パラワン日本語集(JAPALAU)」「loaned Jap's words」を見ながら、戦後世代の館長らに、現在のパラオにおける日本語使用について聞いた。日本時代に教育を受けた世代は現在では80代以上で数が減少している。彼らは戦後も日本語を話していたが、その後の世代では、日本

語を話せる人は少ない。しかしパラオ語の中に相当数の日本語起源の語が定着しているということであった。ただし、もとは日本語とは語形も意味も変わっているものが少なくない。例えば「スコーシオ」は「AIR PORT」を意味するが、それは日本語の「飛行場」から来たという。飛行機を「スコーキ」という。貿易船を「やさいぶね」と言ったりもする。

現在のパラオではパラオ語が話されるが、教育言語は主として英語で、パラオ語の聖書はあるが、他は子どもたちの学校の教科書類は全部英語である。そのため、若い世代では、パラオ語の中の日本語起源の語が、英語起源の語に置き換わる現象も見られるということである。例えば、親が日本語を使っていたオリンピアさんらがパラオ語の中で「トクベツ (特別)」という語を使うところ、子どもの世代は「SPECIAL」で代替するそうである。

続くB、Dのインタビューでその状況が具体的にわかった。高齢者施設であるシニア・シティズン・センターで作業をしている人々の中でも、日本語を話す人は少数であった。マクシーさん(1938 年生)、パウリーナさん(1942 年生)、ミリヤムさん(1941 年生)は、日本時代に学校には通っていない。日本語は話さないし、聞いてもわからないと(英語で)話したが、「(日本語使用は)冗談だけ」だと言い、「元気ですか」「元気です」、「それでいい」「大丈夫」「しょうがない」などがそれであるということで、その場にいた多くの人がこれらの語を理解した。また、日本語の歌をよく歌う。ミリヤムさんは、戦後の小学校で(「マリヤン」のモデルで日本語に堪能な)マリヤに習った。マリヤは日本のカチカチ山のお芝居を(パラオ語に翻訳して)教え、「花嫁人形」は(日本語で)ふりをつけて歌うことを教えたということで、後者を日本語で実演してくれた。

日本語の話せる人は Ngesengeas T. Nakamura (トシコ) さん (1934 年生) だが、同世代の他の人は日本語を話さないという。彼女が話せる理由は、1958 年沖縄出身の男性と結婚したからだと語られた。出会ったころは日本語は忘れていて話すことはできなかったが、夫の親族との共通語として日本語を使う必要が生じ、子どもの頃の日本語を思い出し、次第に使えるようになったということであった。

アントニナ・アントニオさん (1930 年生) は、自由に日本語を話す。日本の公学校で 3 年、補習科 2 年教育を受けた最後の卒業生だという。アメリカ時代になって日本語を使う機会はなくなったが、習った日本語を忘れまいと日本語の歌の歌詞を何度も書き写し、歌い続けた。近年日本人が来るようになり、日本語を話す機会が増え、話す力を取り戻したということである。公学校のときの教科書を何度も読み、ふりがなつきの日本語の聖書を読んだり、ラジオを聞いたりもして忘れない努力を重ねている。そのように努力するのは、日本時代に受けた人間教育を忘れないようにと思うからだと説明された。

数年前のNHK放送や先行調査の状況からさらに世代が移り、お年寄りの間で日本語が 共通語として使われているという状況はもうない。日本語を話す人は存在するが、それは それぞれの事情で日本語を維持したり、新たに学んだりした努力の結果であった。 Dは、日本語に極めて堪能であったマリアの子どもにあたる方々で、コロールの大酋長と女酋長あるが、いずれも日本語は話さない。母のマリアが日本語を自由に使っていた様子が(英語で)語られた。縁者であるルムセイさんとマリアの留学先は当時杉並区にあった三音女学校で、SDA教会の世話によるものであることがわかった。マリアは女酋長になるべき人物でパラオでマリアを知らない人はいないという人物であったこともわかったた。その後、日本でSDA教会の日本人牧師への聞き取りも行ったが、日本時代のパラオでの日本人の活動の中で、現在もパラオに大きな影響を与えているものの一つにSDA教会があることが確認できた。南洋庁では斡旋していなかったが、SDA教会はほかにも複数のパラオ人を日本に留学させている。中島敦の短編「マリヤン」に描かれたマリヤン(マリア)とモデルのマリア・ギボンの差異が明らかになり、中島敦の作品化の過程への示唆も得られた。

調査Cは日本大使館でパラオにおける日本語補習校の様子や日本語・日本文化普及の取り組みなどを聞いた。補習校の児童による「パラオの中の日本」という展示は学年を超えて共通テーマに挑んだ意欲的な試みで、その指導者を含む日本語補習校の関係者へのインタビューは第二回調査の調査Hで実現した。パラオ日本語補習校、パラオ高校、パラオ・コミュニティー・カレッジ(PCC)の三機関の日本語教師等関係者に話を聞いたが、パラオにおける日本語教育機関は、これがすべてであるということであった。PCCでは一般成人向けの日本語教室を行っているとの情報を得ていたが、確認したところ、教員不足が主たる原因で閉鎖したようだということであった。パラオの成人がパラオ日本語補習校に入学を希望してくることがあるが断っているということで、学びたい人はいるが学べる場が不足しているという認識が共通して語られた。ダイビングや釣りなどを目的に来る日本人観光客が多く、彼らを対象にした観光業やガイドの仕事などに日本語が使われること、日本語の歌などへの関心などが、日本語を学びたいということの背景にあるようである。調査Gのカイポさんは、将来パラオに日本語学校を開きたいと語った。

ただ、パラオで働きたいと言う日本人は多く、観光業で日本語を使う主たる業務には日本人がついてしまうため、パラオ人の参入が難しいという事情もあるようである。

現在、パラオ補習校に通う子どもたちは、駐在員の子どもなど日本への帰国を前提とするこどもは少数で、多くは定住児童。両親の国籍の組み合わせは次の3通りであるという。

- ①父が日本人・母はフィリピン人、
- ②父も母も日本人
- ④母が日本人・父はパラオ人

日本の学校と同じ進度で教科書を学ぶというのは現実的ではなく、パラオと日本の関係 を自覚するような活動を交え、発表会やお祭りなど行事を目標に活動している。

調査Eの日本時代に生を受けた人々へのインタビューでは、1925年、1930年、1935年、

と生年によって、戦争の影響を受けた年齢が異なることから、日本時代の思い出やその後 の日本語使用にも大きな違いがある。パラオが戦地になる前は、平和で美しい町であった と語られた。1925年生まれのルムセイさんは、教会の牧師のすすめで、1941年に日本の三 育女学校に留学し、ピアノや聖書を含む教育を受けた。終戦を日本で迎え、パラオにやっ と戻ったら、コロールの町が空襲で焼け、何もなくなっていて、勉強してきた日本語も使 えなくなっていた。が、今でも日本語で聖書を読み、讃美歌を歌っている。同世代の人と は日本語で話していた。1930年生まれのヤチョさんは、日本時代の小学校が楽しかったと 笑顔で語った。先生が親切で、手工芸も教えてくれ、習ったことはその後いろいろ役立っ たという。放課後はコロールの町で日本語でドーナツやアイスキャンデーを買って食べた りもしたのが懐かしいとのことであった。1935年生まれのアントニナさんは予備調査でも 協力を得たが、今回は新たに「ボーイ制度」についての思い出を語ってくれた。パラオ・ コロールには日本人が多く、パラオの子どもたちにとって日本語は第二言語であった。そ の環境を生かして、放課後、日本人家庭にいって手伝いながら日本語を使って学ぶという 制度である。やがて、パラオに空襲がくるようになり、森の中に避難して過ごした。それ でも、日本の学校で勉強したことは一生の財産として大切にし、教科書を繰り返し読んだ り、日本語の歌を何度も書きうつしたりして日本語の独学を続け、今でも日本語を上手に 話す。この世代には、日本語を忘れている人も珍しくないという。日本統治の影響による 日本語話者の高齢化は進み、その数は減少している。

岸川格氏は、母はパラオ人、父は日本人で、日本人社会に住んでいたので子どもの頃から日本語しか話さなかった。8歳までパラオで過ごしたが、終戦後、母親と兄弟をパラオに残し父親が佐賀に引き揚げるのに伴って日本に行き、25歳まで日本で生活した。佐賀の小学校の5年生に編入、中学校、高校を経て、卒業後はダイビングなどを学び、25歳の時、パラオ帰国を決意した。帰国後、資金を貯め、ホテル経営を始めた。フランスから来た水中考古学者のジャック・グストという人物と一緒に海に潜り、パラオの海の保護を勧められたことからダイビングを仕事にするようになり「伝説のダイバー」として知られている。

調査Fの浩子さんは、1965年、20代後半でパラオに渡った。現代ではパラオで暮らす日本人が少なくないが、当時は珍しかった。が、日本時代によい印象をもつ人が多く、大切にしてもらえたという。ダイバーの格さんと出会い、パラオでの定住を決めて結婚した。1968年から食堂「カープ」を経営。日本人客も多いので、店では日本語を使うし、格さんと話すのも日本語である。日本語の文芸雑誌を読むのを趣味としていると語られた。

調査Gは、戦後の世代で、日本語を使って仕事をしているパラオ人の方々である。日本時代の教育とは別にそれぞれ何らかの形で日本語を学び、現在仕事に使っている。この中で、日本語の(漢字を使った)読み書きができると答えたのは、国費留学生として日本で教育をうけた 1982 年生まれのカイポさんのみであった。

カイポさんは日本の文化外国語専門学校の日本語 1 年コースで学んだが、その教え方がすばらしかったと言い、将来はパラオで日本語学校を開きたいと夢を語った。パラオ政府

での現在の仕事で日本語を使う機会はないが、日本語の上手なパラオ人として知られているので、日本のテレビ局などが取材にくると通訳を頼まれることがある。

かつて日本語の読み書きを習得したが、今はもっぱら日本語は会話に使い、読み書きには英語を使う方が多いというのはハルオさんで、「ハルオ」は、父の名前を姓としたものという。客の8割が日本人であるホテルの経営者で、日本語によるサービスに力を入れている。ペリリューの大酋長の家に生まれた。母の父が日本人(日本時代にパラオにいた)。母の兄が戦争中に日本に疎開していた。この叔父が戦後初めてパラオに来て、出会ったのをきっかけに12歳で、この叔父を頼って日本に行った。山梨県の小学校6年生に編入され日本語を学んだ。その後甲府の中学校、山梨の農林高等学校に進み、日本の造園技術を学んだ。山梨大学に進学したかったが、そのとき、ペリリューの大酋長が亡くなり次の大酋長に選ばれたため、進学を断念して19歳でパラオにもどった。

ストムさんは、日本の「ツトム」にあたるが、パラオ語には「ツ」の音がないので「ストム」という。日本人の親戚はいない。ダイビングのガイドで、日本語は客から習った。 客に親しい人がいて、その人の家を何度か訪ねている。日本に行くとサービスの様子を見 学して日本語を学びとっている。妻はパラオで出会った日本人。仕事では日本人客を相手 にすることが多いので日本語を使うが、読み書きの必要はないので、読み書きはしない。

ケルビンさんは、農業研修生として日本で学んだ経験があるが、その研修のみで、日本語を正式に習ったことはなく、読み書きはできない。日本語が少しできるというので、日本から戦没者の慰霊団体がきたときに案内役をつとめて以来、ガイドをするようになった。本職は市役所勤務であるが、日本語のできるガイドとして知られている。

サビーナさんは、日本で暮らした経験があり、パラオ高校で観光について教えている。 日本語ができるので、ときどき頼まれてガイドもするが、やはり読み書きはあまりできな いし、必要だとも思わない。

パラオで日本語を使って仕事をしている人たちに共通した傾向として、仕事ではもっぱら会話力が大事で、日本語によるサービスの力を向上させたいと努力をしているが、読み書きについては必要を感じず、日本についての情報も英語によって得ている、というあり方が確認された。

## インドネシア調査報告

インドネシアの新興産業都市における日本語・日本コミュニティー ——首都ジャカルタ近郊チカラン市のケース——

東京外国語大学大学院総合国際学研究院 降幡 正志

#### 1. はじめに

本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(B))「〈紐帯としての日本語〉日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」の生活言語誌研究」(課題番号 23310176)の一環として、ごくわずかではあるがインドネシアにおける〈紐帯としての日本語〉に関する調査報告である。

以下にも述べるが、インドネシアには大規模な日本人コミュニティーや日系コミュニティー、あるいは日本人や日系人の集住地域といったものが見当たらない。その一方で日本語の学習者数は中国(1,046,490人、26.3%)に次いでインドネシアは2番目に多い(872,411人、21.9%)5。そのため、どのような観点から何を調査するかを選ぶのが難しいところであるが、本調査では、首都ジャカルタ近郊で新たに開発され日系企業も多く参入している産業都市にある日本語学校に焦点を当てることにした。

#### 2. 調査の概要

筆者は、インドネシアでの調査を計2回行なった。第1回調査では予備調査としてジャカルタおよびその周辺にある日本語教育機関のうち、以下の3ヶ所の視察を行なった。

- (1) 日本語学校 AYUMI (2012年3月8日)
- (2) Jakarta Communication Club (2012年3月10日)
- (3) インドネシア大学 (2012年3月12日)

「日本語学校 AYUMI」については後述する。「Jakarta Communication Club」はジャカルタ市内クバヨランバル地区にある語学学校で、日本人向けのインドネシア語講座、インドネシア人向けの日本語講座を開講し、各種文化講座にも力を入れている。同機関の特色のひとつとして、日本語を学んだ若者が日本語で芝居をする「劇団 en 塾」がある。「インドネシア大学」は国内随一の国立大学で、日本語教育・日本研究の分野では人文科学部

<sup>&</sup>lt;sup>5</sup> 『2012 年度 日本語教育機関調査 結果概要 抜粋』(国際交流基金): http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/result/dl/survey\_2012/2012\_s\_excerpt\_j.pdf(2014年3月2日閲覧)

日本研究プログラム、日本研究センターなどを持つ。

これらの視察を踏まえ検討した結果、以後の調査の対象を上記の機関のうち「日本語学校 AYUMI」に絞ることにした。同機関はジャカルタ近郊で新たに開発され日系企業も多く参入している産業都市にあり、大学や都市にある一般的な語学学校に比べてユニークな日本語学習の需要に応えるべく様々な取り組みを行なっているという大きな特色を持つからである。

第2回調査では、西部ジャワ州ブカシ県チカラン市にある「日本語学校 AYUMI」を 2013 年 3 月 22 日~23 日にかけて訪問し、同機関の設立者である木暮七絵氏へのインタビューを行なった。

以下に、同機関の所在地であるチカランの概略を述べ、木暮氏のインタビューの内容を項目ごとにまとめて記す。

## 3. チカランにおける「日本」の状況 ―木暮七絵氏へのインタビューから

#### 3.1 チカランの概略

チカラン(Cikarang)市は、インドネシアの首都ジャカルタの東およそ 30 キロメートルに 位置し、西部ジャワ州ブカシ県の県都となっている。

ジャカルタ郊外、とりわけジャワ島北側の海岸地域は工業地帯となっており、チカランもそのひとつである。1990年ごろから都市開発が進み、Lippo Cikarang、JABABEKA、EJIP (East Jakarta Industrial Park)など工業団地を中心として住宅団地、商業施設、レジャー施設などを含む総合的な産業都市が開発されている。「お腹の中から墓まで」というコンセプトがチカランにあるという(木暮七絵氏談)。日系企業も数多く、木暮七絵氏によると、数年前のJETROのデータでは、インドネシア全体に1,006社の日系企業があり、その8割がチカランとその東のカラワン(Karawang)県に進出しているという6。

#### 3.2 チカランにおける「日本」の状況

2013 年 3 月に調査のためチカランを訪れたとき、「第 2 回さくら祭」の開催準備が進められていた。「さくら祭」は若手の元日本留学生らで構成する KAJI(Komunitas Alumni Jepang di Indonesia、インドネシア日本同好会) $^7$ の主催で、 $^2$ 012 年に第 1 回が開催された。第 2 回も第 1 回と同じくショッピングモール Citywalk Lippo Cikarang で 4 月 6 日~ $^7$ 

<sup>6 2011</sup> 年 9 月時点でのジェトロ・ジャカルタの調べによると、インドネシアの日系企業数は 1,225 社(https://www.jetro.go.jp/world/asia/idn/basic\_01/, 2014 年 3 月 2 日閲覧)。 7 KAJI ウェブサイト: http://www.kaji.or.id/(2014 年 3 月 2 日閲覧)

日に開催の予定となっていた。なお、木暮氏によると、KAJI はメーリングリスト登録者が 3,000 人以上あり、日本大使館とも密な連絡を取っているが、その活動は広く浅く、とのことであった。

チカランには日系企業が多く、そこで働いている日本人も多い。ただし必ずしもチカランに在住しているわけではない。木暮氏によると、ジャカルタやその近郊に住み、仕事時にのみチカランに来る日本人も少なくないという。一方、日系企業で働くインドネシア人も当然のことながら多い。またインドネシア人の配偶者と結婚してチカランに住んでいる日本人もいる。

以前「YUTAKA」という小規模な日本語学校があり、2000年代初頭はほとんど独占状態だったが、マネージメントの問題なども抱えていた。木暮氏はしばらくYUTAKAで日本語を教えていたが、後述するように2004年より日本語学校AYUMIを立ち上げることとなった。

#### 3.3 木暮七絵氏の経歴

木暮七絵氏は、東京外国語大学外国語学部東南アジア語学科でインドネシア語を専攻し、1996年の卒業後に数年日本で仕事をしていた。インドネシア人の男性と結婚し、2001年からチカランに居を構えることとなった。

ほどなくして第1子に障害があることがわかった。発達障害のある子どもの子育てをする中で、サポートを求めるよりも自身になにかができないかと考えがより強くなり、以前から考えていた「語学を生かした貢献をしたい」という思いなどが重なり、2004年1月に日本語学校 AYUMI を設立した。

2008 年 11 月には、日本で技能実習を行なうインドネシア人への事前研修と帰国後のサポートを行なう株式会社 MINORI を設立した。また 2010 年 2 月には発達障害児・者の社会的自立を支援する目的で財団法人 MILESTONE も設立している。

#### 3.4 日本語学校 AYUMI および木暮氏の手がける事業について

#### (1) 日本語学校 AYUMI (「歩」)

日本語学校 AYUMI は、2004 年 1 月 5 日に設立された。「異文化コミュニケーションのトータルソリューション」(Total Solutions for Intercultural Communication) をモットーとする。主な事業内容は以下のとおりである。

- 1. 日本語コース(企業、一般、プライベートクラス)
- 2. 駐在員のためのインドネシア語コース
- 3. 翻訳・通訳サービス

なお、2010年9月には、株式会社 MINORI に属する教育機関のひとつと位置づけられた。

AYUMI の特色として、「働くための日本語」に特化していることが挙げられる。これは、 日系企業に働くインドネシア人受講生が多いことを反映している。こうした受講者に対応 するひとつの例として、朝と夕方に同じ内容のクラスを開講し、受講者自身の就業時間に 応じてどちらかに出席するという「パラレルクラス」を設置するといった工夫もみられる。

また教材も「働くための日本語」を目的とし、『はたらく にほんご』と題する教材を独自に開発している。日本語教育においては、「(入り口、きっかけとして) 仕事に関わることばをまず教え、実際に仕事をする中で体感的に覚えていく」という手法を採っているという。

#### (2) 株式会社 MINORI (「実」)

株式会社 MINORI は、2008 年 11 月 11 日に設立された。「ものづくり・人づくりを応援する」(Supporting Manufacture and Human Development) をモットーとする。主な事業内容は以下のとおりである。

- 1. インドネシア人技能実習生送り出し
- 2. 帰国後技能実習生のスキルアップと就業支援
- 3. MINORI ブランドの開発・製造・販売

また子会社として縫製工場の REN CREATIVES を有する。

MINORI の特色として、単に研修を行うだけでなく、日本への渡航前から日本での実習を終え帰国した後のサポートに至るまで、幅広く人材の育成に力を入れていることが挙げられる。木暮氏が述べていた「人材を一から育てる」といった意思にも、そのような人材育成の姿勢が強く感じられる。

#### (3) 財団法人 MILESTONE

財団法人 MILESTONE は、2010 年 2 月 23 日に設立された。「発達障害児・者の社会的自立サポート」をモットーとする。主な事業内容は以下のとおりである。

- 1. 発達障害児を対象とするセラピー・療育相談
- 2. 発達障害理解啓蒙活動
- 3. 貧困家庭の障害児に対する奨学金の支給

財団法人 MILESTONE は、上述の株式会社 MINORI が同財団法人を通じて「地域社会の生活の質の向上を目的とする活動に積極的に参与」する、という役割も担っている。



#### 3.5 木暮七絵氏へのインタビューから

木暮七絵氏へのインタビューは、さまざまな話題について内容が多岐にわたった。その中で本調査に直接関係する「日本人コミュニティー」と「日本語」、必ずしも直接とは言えないが大いに関連する「コミュニケーション」について以下にまとめた。また、最後に「木暮氏自身」について彼女が述べたことを若干付け加えておく。この中には本調査とは関連がないようにも見えるものもあるが、実際にはインタビュー全体をとおして大なり小なり関わっていると思われる。

## [1] 日本人コミュニティーについて

日本人コミュニティーあるいは日系コミュニティーに関する話題は多くはなかったが、 木暮氏は「日本人コミュニティーはまだまだ個別に動いている印象」と述べていた。筆者 の知る限りでも、インドネシアには大規模な日本人コミュニティーや日系コミュニティー、 あるいは日本人や日系人の集住地域といったものが見当たらず、まさに木暮氏の印象どお りの感がある。 そのような中で、日本人の日常生活に関する情報を公に扱っているメディアとして『じゃかるた新聞』の存在を木暮氏は挙げていた。同紙は1998年に「英語を除く発の外国語新聞として刊行」され、「日本とインドネシアをつなぐ、インドネシア最大の日本語メディアとして発展」している8。

# [2] 日本語について

「日本語」についての木暮氏のコメントは、大きく日本語教育と日本語使用の2つに分けられる。日本語教育に関しては、すでに「日本語学校 AYUMI」の項でも触れているが、それ以外に「日本語教師の位置づけがまだ低い」と述べ、その一因として「資格の未整備」を指摘していた。一方で「"話せれば教えられる"という誤解」もあるといい、日本語教師に求められる能力として「日本語能力」「教える能力」に加え、「サービス精神」も必要である。「サービス精神」は、「教えることで成果が求められている」ため、"やる気のない人"にも教えなければならない事情があるからなのだという。

日本語使用つまり仕事で日本語をどのように生かすかについて、まず木暮氏は「日本語の需要の高まり」について述べていた。「技術、得意分野がないと難しい」としながらも「日本語ができればやれる仕事はたくさんある」あるいは「子どもを日本に留学させて、日本語を身につけて帰ってくると将来性がある」「留学経験があると待遇が良くなる」と述べていた。木暮氏のもとには「留学経験者の紹介の問い合わせもよくある」のだという。また「技能実習生として日本語専攻の学部卒業者の需要もある」など、企業として技能より日本語をすでに身につけている人材を求めるケースもあるそうだ。ただしネックとして「(日本語専攻の学部卒業者は)女性が多く男性が少ないこと」という点を挙げていた。

# [3] コミュニケーションについて

「日本語学校 AYUMI」では、実は「むしろインドネシア語の教育の方が需要がある」傾向にあるという。日系の企業でも英語やインドネシア語を用いることにより「通訳をやとわずに(済む)」ようになり、結果として「日本語の通訳はいらなくなる」可能性もあるようだ。日系企業で勤務するインドネシア人は、総務や経理といった事務能力と日本語能力の「どちらの能力が必要か」という選択に迫られることもあるらしい。

またある企業の社長が「がんばってインドネシア語を学ぶ」ことで社員とコミュニケーションを図る努力をするケースもあるという。ただ、木暮氏は、(社長がインドネシア語を学ぶ姿勢を見て)「自分(=インドネシア人)たちもがんばって日本語を学ぶ」という姿勢が生まれれば、お互いに理解し合うことにつながり、そこから「真のコミュニケーション

<sup>8 『</sup>じゃかるた新聞』ウェブサイト: http://www.jakartashimbun.com/(2014年3月2日閲覧)

(が成り立つ)」であろうと考えている。このような相互理解の必要性は、木暮氏自身が AYUMI を設立する前に企業勤務をしていた際の「お互いが理解し合わないと通訳がいても いなくても同じ」すなわち「理解し合う努力をしないといけない」という実体験も根底に あるようだ。通訳についても「一字一句の直訳」ではなく「コミュニケーションを図る通訳」が必要だと述べていた。

コミュニケーションについて、木暮氏は「言葉と文化は密接」であり「文化を見ないと 結びつけられるものも結びつけられない」とも述べ、その一例として「"すいません"をいつ 使うか」を挙げた。

# [4] 木暮氏自身について

木暮氏の夫は日本に長期の留学を経験しており日本語が流暢で、彼女と夫とは「日本語で会話」している。一方、3人の子どもとは「インドネシア語で会話している」という。

第1子は上述のとおり発達障害があり、インタビュー当時は小学校6年生相当だが通学していない。第2子は小学校4年生、第3子は小学校2年生で、共に学校でインドネシアの一地方語であるスンダ語の授業があるという。「普段はたいした授業をせず、視察があるときには歌を歌ったりなどのパフォーマンスをする」らしく、「スンダ語の授業は"何の役に立つのか"という意見が多い」そうだ。

自身で事業を手がける上で、かつて勤務していた企業での「営業、秘書の経験が生きた」とも述べていた。最後に、彼女の目下の課題として「秘書などの人材育成」を挙げていた。「自分一人でできるけど、自分が忙しくなりすぎてこなしきれなくなるし、人が育っていかない」のだという。

#### 4. おわりに

インタビューの冒頭で、木暮七絵氏は「飾らなくて、このままでいいのなら…」と述べ、 調査に協力してくださった。結果として、話題は多岐にわたったが、新興の産業都市に拠 点を置いて日本語学校など事業を運営する立場から、同地における「日本」のさまざまな 関わりが見えてきた。多忙の中、2日間にわたってわざわざ時間を割いて下さった同氏に、 この場を借りて敬意を表するとともに厚く御礼申し上げる次第である。

本稿は、木暮七絵氏へのインタビュー内容を報告するにとどまってしまったが、それでも〈紐帯としての日本語〉という観点からは興味深い点が多々見られた。より詳細な調査・研究を今後の課題としていきたい。

## 【追記】

木暮七絵氏については、NHK (BS1)『ヤマザキマリのアジアで花咲け!なでしこたち』で 2013 年 8 月 13 日に放送され、その内容は KADOKAWA (メディアファクトリー) 刊行のコミックエッセイ『ヤマザキマリのアジアで花咲け!なでしこたち2』(2013年)にも収録されている。

# 【参考資料】

日本語学校 AYUMI ウェブサイト. http://www.ayumi.co.id/ 株式会社 MINORI ウェブサイト. http://www.minori.co.id/ 木暮七絵.『インドネシアでわたしがする 10 のこと』(東京外国語大学学部学生向け講演). 2011 年 5 月 27 日.

『はたらく にほんご』レベル I. (日本語学校 AYUMI 教材). 2005 年.

『はたらく にほんご』レベル II. (日本語学校 AYUMI 教材). 2006 年.

『はたらく にほんご』レベル III. (日本語学校 AYUMI 教材). 2006 年.

## 台湾調查

台湾在住の日台国際結婚家庭における日本語意識:世代間の相違を中心に

東京外国語大学国際日本研究センター 谷口龍子

#### はじめに

2000年代以降、台湾各地で在台日本人配偶者による継承日本語ネットワーク形成への動きが顕著にみられるようになった。中でも 2000年に開設された台北日本語授業校は、幼児から中学生まで 90名に上る国際児に対し、在台日本人配偶者が持ち回りで日本語教育(毎週土曜 2 時間)を行っている公的認可校で、このように 10年以上も継続的に行われている組織は、中国、韓国などの近隣諸国も含めて例を見ないという。

周知のように、台湾は、戦前 50 年におよぶ日本統治下で国語としての日本語教育が行われ、戦後は、国民党政権による日本語排除の歴史を持つ。現地に住む日本人配偶者により、継承言語教育として日本語教育が行われるには、当事者たちの動機や意志だけではなく、それらの活動を受け入れる今日の台湾における言語政策または言語教育に関わる行政、社会環境が整わなければ実現は難しいと思われる。

台湾在住の日台国際結婚家庭における日本語意識について、①現地の言語・教育政策の変化、②社会環境の変容、③日台国際結婚家庭の日本語意識の変化について考察することが本研究の最終的な目標である(①、②および台北日本語授業校の概要については、谷口(2013)で発表済みであるので、こちらを参照されたい)。

本報告書では、③日台国際結婚家庭の日本語意識について、世代の異なる日台国際結婚 家庭(日本語補習校に通わせている新世代、戦後の日本排除時代、日本統治世代)に対し て行ったインタビュー調査の内容を中心に報告する。

1. 調査期間: 2012年3月5日~3月11日、2012年9月14日~9月20日、2013年2月28日~3月4日

#### 2. 調查対象者

台湾在住の日台国際結婚家庭の成員(日本人配偶者、台湾人配偶者、および子供(国際児))。ここでは、便宜上、日台国際結婚家庭の日本人配偶者を世代毎に、新世代、日本語排除世代、日本統治世代に分ける。

#### 3. 調査の概要

・現地における対面あるいは電話による聞き取り調査。筆記記録、あるいは IC レコーダーの録音による記録を文字化した。

# 4 インタビュー調査

## 4-1 新世代の日台国際結婚家庭

氏名	性	生年	現住	職業、その	家庭言語	子供、授業校への通学
	別		所	他	J=日本語	F=女性
					C=中国語	M=男性
					E=英語	
N · A	F	1967	台北	看護師→主	J母→子	F (2002 生)
				婦、米で結	C 父→子	英、中のバイリンガルスク
				婚、1992 か	C 夫婦	ールに通学、幼稚園から授
				ら台湾在住		業校通学
$M \cdot S$	F	1964	台北	米で結婚、	E 夫婦	F (1993 生),小 2 から通学
				1991 から台	J母→子	F (1998 生)小 1 から通学
				湾在住	C 家族	
К•К	F	1962	台北	翻訳業	J母→子	M (2001生) 小1から通学
				1988 から台	C 夫婦	M (1997 生)幼稚園から
				湾在住	C 父→子	通学、受験勉強のため辞め
						たが、中2で補習校に再通
						学
Su•K	F	1962	台北	元日本語教	J / C	F (1991 生)
				師、日本で結		F (1994 生)
				婚		
E • M	F	1964	台北	ホテル業務、	J/ C	M(1993生)
				日本で結婚		M(1997生)
$S \cdot K$	F	1965	台北	日本で結婚	J	M(1996 生)
						M (1999 生)
H•M	F	1967	台北	台湾で結婚	J母→子	F (2000 生)
					C 父→子	
					J 夫婦	

# 主な質問内容:

- ① 家庭内外での日本語使用の状況
- ② ①についての台湾人配偶者、日本人配偶者、国際児の感想

- ③ 日本語補習校に子供を行かせる目的(あるいは行かせない理由)
- ④ 日本語補習校での活動についての感想 (←主に国際児に対して)
- ⑤ 台湾社会での日本語使用についての考えあるいは今後の展望

# インタビュー内容の抜粋

日本語補習校に子供を行かせる目的(あるいは行かせない理由)について:

NA・子供に日本語で話しかけても中国語で答えが返ってくるのが寂しい。家族で話す時もいつも中国語なので、母親の言葉を教えたいと思った。

・授業校は子供ばかりでなく、同じ境遇にいる母親たちにとっても一体感を感じる場と なっている。夫は補習校通いに賛成している。

NAの子供・補習校には幼稚園から通っている。補習校は楽しい。日本語を覚えたり、友達もできて歌も歌える。

- MS・日本語能力の向上が目的。将来、父親を亡くして、急に日本に帰国する可能性もある。その際に日本でしっかり生活できるような語学力を身につけさせておきたい。
  - ・日本の四季や価値観などがわかる日本の小学校の教科書を使って日本語を教えたいと 思った。
  - ・子供たちは日本が好きで、将来日本で働きたいと思っている。特に下の子供は日本の 物しか着ないし、日本のドラマや番組しか見ない。
  - ・子供たちは補習校に通うようになり、小さな社会でのアイデンティティを意識するようになった。上の子供はハーフに敏感で、同じ境遇の子供たちと一緒にいることで安心するようだ。小学5年から学校の宿題が増えて授業校に通わせることは大変だったが、続けさせた。
  - ・夫は授業校通いにおおむね賛成している。
  - ・補習校に子供を行かせない家庭もある。社会で使われている言葉を学ばせるべきだ、 子供が日本語を覚えると台湾人の父親と会話ができなくなるなどの理由である。
- KK ・なでしこ会(日本人婦人会)から呼びかけがあり、軽い気持ちで行かせた。そこで 自分と同じような家庭と知り合い、自分達が特別ではないことを知った。

KK の子供 M (1997 生)・補習校はとっても楽しかった。特に発表会が楽しかった。現在 (高校) でも日本語を選択して習っている。

KK の子供 M (2001 生)・絵本を読んだり、しりとりが楽しかった。

KK の台湾人配偶者・子供たちが補習校に通うことに反対はしない。

SK・近所の人に誘われて行かせたが、ガールスカウトの活動と重なり、大変になったので、 今は行かせていない。

EM・自分が体を壊し、子供を連れていくことができなくなったので、授業校通いは3か月で辞めてしまった。夫が日本語が堪能なので授業校にあまり積極的ではない。

HM・自然に子供に日本語を学ばせたいと思った。日本人学校では日台国際結婚家庭の児童

は差別されると聞いている。

SK さんの子供 (1996 生)・小学校 5 年次で歴史を習った時に、教員やクラスメートにいじめられた。しかし、その後、日本語能力試験 1 級に合格したら、逆に一目置かれるようになった。台湾人の父親のことはあまり好きではない。

#### インタビューからわかったこと

- ・日台国際結婚家庭の成立パターンの多様化が特筆される。台北日本語授業校に子供を通わせている家庭は、家庭内で日本語以外の言語が使われているところが多い。夫婦が出会った場所が台湾あるいは第三国であり、台湾人配偶者は日本語があまりできないという理由がある。子供と日本語で会話をしたいという母親としての望み、親の離婚や死別などにより将来日本に帰国する可能性もあることを考えて子供の将来のために日本語能力を身につけさせたいという実学目的もある。
- ・同じ境遇の仲間と時間を共有し話し合えることで、授業校は、日本人配偶者、子供の双 方にとって心の拠り所になっている。また、母と子という一対一の関係ではなく、授業校 というコミュニティが子供たちを育ててゆくという役割も担っている。
- ・その一方で、台湾の家庭や児童との区別化も意識下に醸成されつつある日本人配偶者や 子供もいる。
- ・台湾の学校は宿題がとても多いので、子供の勉強の重荷になったり、クラブ活動に専念するために辞めざるをえなくなることがある。特に勉強の負担がより増える高学年になると辞めるケースが多い。
- ・台湾人の父親が日本語ができる家庭は、授業校へ通うことをあまり進めないようである。
- ・現地社会に溶け込むために、現地の言語を学ぶべきだという考えを持つ家庭は子供を補 習校へ行かせない。

#### 4-2 日本語排除世代の日台国際結婚家庭の日本人配偶者

	性別	生年	現住所	職業	家庭内言語	子供
$0 \cdot s$	F	1941	台北	元大学教員	J,夫の母親は日	F(1972 生)
				(日本語)	本人	日本留学経験有

# 日台国際結婚家庭の国際児

氏名	性	生年	父	母	出	現 住	職業	家庭使	その他
	別		籍	籍	身	所		用言語	
$J \cdot J$	M	1954	台	日	新	苗栗	会社員	客家語	日本語×
			湾	本	竹				

W·W	M	1945	台	日	神	新竹	日台貿易	J	小 4 時に台
			湾	本	戸				湾へ
W · M	F	1964	中	日	台	台中	大学教員	С	
			国	本	北		(日本語		
							専門)		

# 主な質問内容

- ① 家庭内外での日本語使用の状況
- ② ①についての台湾人配偶者、日本人配偶者、国際児の感想
- ③ 日本語補習校での活動についての感想
- ④ 台湾社会での日本語使用についての考えあるいは今後の展望

#### インタビューの抜粋:

- WM・台湾人の父親が国家公務員で官舎に暮らしていた。日本語を使うといじめられることから、外では一切日本語を使わなかった。
- JJ・日本人の母親は客家語が大変流暢だったので、家庭では客家語しか使わなかった。 だから、自分はまったく日本語ができない。母親は家でも外でも一切日本語を使わなかった。
- WW・小学校4年の時に神戸から台湾の彰化に引っ越した。田舎だったので、日本語の使用は制限されなかった。朝礼時に自分だけが靴をはき、他の子供たちは裸足だったのに気付き、優越感を感じたことを覚えている。
- ・台湾語が下手で最初はよく笑われたが、年上だったので、けんかはいつも勝っていた。 また、成績もトップクラスだったのでいじめには遭わなかった。
- OS・国際社会のために様々な言語を習得することは大切なので、子供を授業校に通わせる ことには賛成する。

## インタビューからわかったこと

日本語排除の世代と言われているが、地方では日本語の使用がそれほど制限を受けなかったところもある。日本語使用への意識や頻度は、家庭内で大きく異なる。この世代で日本語が使える人材は現地に少ないことから日本語が使える者はその強みを生かした職業に就いている。

## 4-3 日本統治世代の日本人配偶者

氏名	性別	生年	現住所	職業	家庭内言語	子供
О•Е	F	1935	台北	主婦	J	F(1947生)

<b>Y</b> • <b>Y</b>	F	1920	台北	主婦	J	なし
U · K	F	1936	台北	主婦、元日本	J母→子	M(1957生)
				人婦人会会	C子→父	M(1958生)
				長		F(1959生)
H • C	F	1929	台北	主婦	J	F(1959 生)

#### 主な質問内容

- ① 家庭内外での日本語使用の状況
- ② ①についての台湾人配偶者、日本人配偶者、国際児の感想
- ③ 日本語補習校での活動についての感想
- ④ 台湾社会での日本語使用についての考えあるいは今後の展望

#### インタビューの抜粋:

- HC・昔は、結婚したら日本籍を捨てなければならなかったので、台湾に来るには、覚悟が必要だった。今は、台湾が嫌なら日本に帰ればよい。
- ・台湾に来た時は、台湾語ができないからいじめられたが、悔しいから一生懸命勉強して そのうち台湾語が上手になった。
- ・台湾の学校は宿題がとても多くて大変なのに、現代の日台国際結婚家庭の児童を授業校 に行かせるのには反対する。子供の負担が多くてかわいそうだ。
- UK・嫁いだばかりのころ住んでいた教員宿舎では、家の前にごみを捨てられたり、悪質ないじめに遭い、とても嫌な思いをした。
- ・日本語を使う老人ホームに時々行く。
- ・次男は下手な日本語を一生懸命に話そうとしてくれる。娘も日本語は下手だが、日本の テレビドラマは大好きでよく見ている。

## インタビューからわかったこと

この世代の家庭内言語は日本語であり、日本人配偶者は専業主婦が多く、夫婦は現在でも日本語でコミュニケーションをとっている。しかし、子供は現地の学校に進み、台湾社会で家庭を築いている。新世代の家庭が子供を授業校に行かせることについては子供の負担が大きいという理由で好意的ではない者もいる。

#### おわりに (調査結果要旨)

戦前は、台湾人が日本留学時に日本人女性と結婚するパターンがほとんどで、家庭内での使用言語は日本語だったが、子供たちにはできるだけ台湾語を使わせ、台湾の社会に順応するようにしつけていた。使用言語も含めて台湾社会への配慮や適応に力点が置かれていたと思われる。

しかし、今日は、台湾や別の国で出会い、中国語や英語でコミュニケーションを取る日台国際結婚家庭も増え、日台国際結婚家庭の夫婦の力関係や使用言語にバラエティがあることから、子育でも多様化している。日台国際結婚家庭の成立パターンや家庭内での使用言語の変化が継承日本語への意識を生んだ要因の一つにあると言えよう。また、勤務先の移動や離婚などにより、居住地の選択肢も増えていることから、様々な可能性に備えて、子供に教育を受けさせる必要があるという現実もある。日台国際結婚家庭の成立パターンの多様化により、子供たちの将来に向けた実利目的として日本語教育を考えることや、子供と日本語で話をしたいという日本人配偶者の欲求は共感を呼ぶものである。今日では、現地社会への適応や配慮よりも個の欲求や目的を重視する意識の強さが継承日本語教育への動きを活発化させているといえる。しかしながら、継承日本語教育への動きは、現地においてマイノリティである日台国際結婚家庭の日本人配偶者や子供たちにとって拠り所となると同時に、台湾人家庭との区別化を意識的あるいは無意識のうちに助長させることも起り得るという事実も否めないであろう。

#### 調査に関連する発表論文

- ・谷口龍子「日本語排除から日本語受け入れへ一戦後台湾における言語政策、社会的環境の変容と継承日本語との関わりー」,『東京外国語大学論集』,86号,2013年
- ・呉翠華・谷口龍子「論児童歌謡教育與生活美学培育之関係-以日本唱歌、童謡教育為例」, 『生活美學與芸術』商鼎数位出版有限公司,,2012年(日本統治世代へのインタビューを通 じて、日本語の歌が現代の老後生活の欠かせない大きな楽しみの一つとなっていることが 観察され、その事実についてまとめたものである)

#### 謝辞

本調査にご協力くださいました台湾在住の日台国際結婚家庭の皆様に心より感謝申し上げます。

# 北米調査報告

# 戦後北米の日系アメリカ人の経験

東京外国語大学国際日本研究センター 友常勉

#### はじめに

科研〈紐帯としての日本語〉の北米日系人調査のパートでは、ロサンゼルスの日系アメリカ人三世のヒアリングと、近年のアメリカ西海岸の大学アカデミズムにおける日系アメリカ人・アジア系アメリカ人研究のリサーチを中心におこなった。

日系三世の使用言語は英語であり、意識的に学ぶことなくして日本語を話すことはない。 ただし、日本との関係や二世との世代の〈つながり=紐帯〉として日本語あるいは日本ル ーツの文化的アイデンティティが姿を現すことがある。それゆえこのパートではおのずと 「紐帯としての〈日本〉の検討」が課題となった。そこでは、①日本由来の宗教(仏教) や県人会組織を通じて再生産されている伝統文化(民謡など)をよりどころとした文化的 紐帯を維持する立場、②1960年代の公民権運動や学生運動を経験し、日系人としてよりは アジア系アメリカ人としてのアイデンティティを選択していく立場の両極が存在する。す なわち移民の送り出し元のエスニック・アイデンティティの保守か、ホスト社会のなかで の適応(そして「同化」)かという両極である。日系アメリカ人社会では②の立場が主流で あり、①の立場は②の立場に対して補完的な関係にある。両者はときに対立的である。そ れは20世紀前半の北米移民史のなかの記憶、戦時期の強制収容、そして60-70年代の公 民権運動の時代をどう経験したかにかかわっている。それが後述する「リドレス」の評価 にもかかわっている。そうした世代差を自覚しながら、現在の日系アメリカ人たちは、ア ジア系アメリカ人としての政治的文化的現在を共有している。ただしこうしたアイデンテ ィティ・ポリティクスと並行して、市場価値に基づいて、あるいはエスニック・アイデン ティティを意識して、第二言語として日本語を「選びなお」し、子どもたちに日本語を習 得させようとする日系人たちも少なくない。

アメリカ西海岸の大学アカデミズムには、移民研究の手法にもとづく日系移民研究・移民労働史研究の分厚い蓄積がある。そして、日米戦争中に強制立ち退き・強制収容された日本人移民・日系アメリカ人に対する各2万ドルの補償を含む、1988年のレーガン政権のもとでの「市民の自由法」署名という「リドレス」(公的な謝罪)が、研究においても重要な契機をなした。この「リドレス」にともない、新しい「全米日系人博物館」が建設され(1992年)、研究・大学機関における強制収容経験についての膨大なオーラル・ヒストリーのアーカイヴ化が実現した。アジア研究の有力な一部を構成する日系アメリカ人研究は、現在、ダイアン・フジノ(カリフォルニア州立大学サンタバーバラ校)による60年代70

年代における公民権運動や反人種差別闘争を担った日系人活動家たちのライフ・ヒストリーの刊行にみられるように、高等教育を受けた三世たちに焦点をあてている。それは「アジア系アメリカ人」としての社会的要請にシフトしていく日系アメリカ人たちの歴史過程に対応しているといってもいい。

以上のようなことから、本調査の課題は、日系アメリカ人のエスニック・アイデンティ ティの推移をふまえながら、「紐帯としての〈日本〉」の契機を確認し、その意味を検討す ることとなった。

#### 1 調査研究の前提

「はじめに」で記したように、北米の日系アメリカ人研究は、分厚い移民研究史とエスニック・アイデンティティの研究を資源として、19世紀末から 20世紀初頭のハワイ・中南米プランテーション、強制収容、戦後公民権運動とラディカルたちの経験のライフ・ヒストリーを蓄積している。そのもとで、それまでの二世・三世に同質性を設定してきた研究に対して、日系アメリカ人たちのアメリカ社会への同化の進展とともに、そこに一元化できない多様な政治戦略や対立に注目する研究が生まれている9。

同様に特筆されるのは、こうした傾向を加速させている強制収容経験と 60 - 70 年代のラディカリズムについてのライフ・ヒストリー研究の広がりである。すなわち、長年にわたる公民権運動とブラック・パンサーとの共闘で知られ、著名な活動家であるユリ・コチヤマの研究。昨年、FBI のインフォーマントではなかったかという"ルポ"によって政治的に焦点化した、ブラック・パンサーの非黒人メンバーとして知られてきたリチャード・アオキの研究<sup>10</sup>。さらに強制収容経験をバネに公民権運動を担った多くの日系アメリカ人活動家たちの研究<sup>11</sup>。とりわけ 60 年代ラディカリズムのイコンの一人であったリチャード・ア

\_

<sup>&</sup>lt;sup>9</sup> 管見のかぎりでは Jere Takahashi, *Nisei /Sansei: Shifting Japanese American Identities and Politics* [Temple University Press1997]、Lon Kurashige, *Japanese American Celebration and Conflict: A History of Ethnic Identity and Festival in Los Angeles, 1934-1990* [University of California Press 2002],さらに日系アメリカ人を含めた、最近のアジア系アメリカン人の政治選択について、統計資料を用いた分析として Janell Wong, S. Karthick Ramakrishnan, Taeku Lee, And Jane Junn, *Asian American Political Participation: Emerging Constituents and Their Political Identities* [Russell Sage Foundation 2011]。

<sup>&</sup>lt;sup>10</sup> これについてはダイアン・フジノの一連の仕事が参考になる。Diane C. Fujino, Heartbeat of Struggle: The Revolutionary Life of Yuri Kochiyama [University of Minnesota Press 2005]、Samurai Among Panthers: Richard Aaoki on Race, Resistance, And Paradoxical Life [University of Minnesota Press 2012]. セス・ローゼンフィールドによるリチャード・アオキの「FBI スパイ」説とそれに対する反論を含めた分析については、Amerasia Journal vol.39-2[2013]の特集が参考になる。

<sup>11</sup> 後述する二世プログレッシヴとの関係から、ここでは Diana Meyers Bahr, The

オキについてのダイアン・フジノの評伝は、屈折したアイデンティティと愛国主義的ミリタリズムへの傾斜、そして反人種主義の思想などの複合として日系三世を描いた点で重要である。

## 本調査の成果

こうした研究動向に対して本調査がおこなったのは次の三つのテーマである。①これまで限られたリソース・研究しか存在しなかった 1950 年代の二世プログレッシヴ[Nisei Progressives]の活動。これは従来の日系移民史研究・日系移民の公民権運動の空白を埋める作業として位置づけられる。②日本文化と日系三世たち。ここでは宗教活動を紐帯とした日系移民社会の結合の形態、および県人会組織と民謡大会を介した日系社会の結合形態の調査。また、日系家族と日本語教育とのつながりを知るために、ロスアンゼルスの日本語学校においても調査をおこなった。③日系アメリカ人とアジア系アメリカ人としてのアイデンティティの差異と共存の在り方についての調査。

#### 2 二世プログレッシヴ

二世プログレッシヴは 1948 年へンリー・ウォレス大統領選挙のための党 Progressive Party の日系組織として Sakae Ishihara を中心に結成された左翼組織である。メンバーの特徴は戦前に存在した二世プログレッシヴより一回り以上若い世代で、大学教育を受け、強制収容所・二世部隊への従軍経験(S. Ishihara は MIS に従軍)がある。大学教員、専門技術者、自営業者、ディズニーのアニメーターを含めた映画関係者など、二世の文化的経済的上層が中心であった。また白人の左翼知識人やハリウッド関係者のサポーターも存在した。二世プログレッシヴはウォレス選挙後、1949 年に活動の継続をめざして綱領を策定する。それは、「一般綱領:日系の問題は全移民・全人民の問題と宣言、親コミュニズム」であり、「個別綱領:強制疎開・強制収容への補償、コミュニティ防衛」であった。1952年には全米で日本人民版画展を開催し、日本人の左翼芸術家との連帯運動をすすめている。こうして1952年移民および国籍法(McCarran-Walter Act 1952:移民の分類・移民数の制限と共産主義運動・政治活動関係者の国外追放条項などを含む)に対する抗議行動や、「一般綱領」にもとづく国際平和運動の推進、文化運動戦術を展開した。

総じて反人種主義闘争と階級闘争の連結、愛国主義的政治的前衛としての Progressive-ness の形成をめざしている。それは強制収容世代の経験から出発した、第二次 大戦後の日系アメリカ人の文化的感情的ルーツに依拠した運動であったとみなすことができる。そしてそこに日系アメリカ人としてのアイデンティティの表出があったといえよう。 なお資料として図 1 二世プログレッシヴ略史[figure.1 Brief history of Nisei Progressives]と図 2 二世プログレッシヴの主なメンバー表[figure. 2 Leading persons'

Unquiete Nisei: An Oral History of the Life of Sue Kunitomi Embrey [Palgrave Macmillan 2007]をあげておく。

list of Nisei Progressives]を添付しておく。

figure.1 Brief history of Nisei Progressives

	NP activities	historical issues
	INF activities	
	For Henry Wallace presidential	racially offensive
	election, first meeting at Sake	remark made by NY
1947	Ishinara's house in LA. NY Nisei	mayor LaGuardia and
	Progressives formed. Take a census	visit of Caucasian
	of African American in Little Tokyo	Progressives to
	of African Africa Carrin Lictle Tokyo	JACD
	Presidential election. Ishihra went to	
1948	N.Y. for Iva Toguri (Tokyo Rose).	
1340	Iiyama moved to Chicago (40-50 NP	
	numbered, core was 20)	
	NY NP member attended Paul	
	Robeson concert (African American	
	singer, civil rights and progressive	
	activist) and was attacked by White	
1949	Americans. Sakae Ishihara	
	organized a conference for new NP	
	シビックセンターとLA市警ビル建設	
	計画によるリトル・トーキョー移転計	
	画(The Independent 1949)	
1950		
1951		
1952	日本人民版画展(全米 70ヵ所で開	
	催)	

figure.2 Leading persons' list of Nisei Progressives

	194		birth	parents'			trajector	
name	9co mmit	branch			profession	activity	y after	Ref.
	tee		year	origin			NP	
Ishihara, Sakae	*	LA, NY	1921		服装店経営	leading parson		RS199 7.12.1 1
Kunitomi, Embry,	*	LA	1923					Unqui et
Sue Ishihara,Okanishi	<b>*</b>	LA		Hawaii		treasure		Nisei RS
, Fumiko	' ·				Dil i i			110
Ishii, Chris	*	LA	1919		Didsney animator, editor of Crossroads	, attended Disney workers strike in 1941,layout and illustrations for The Independent		RS
Takei, Arthur (Art)	*	LA						RS
Sato, Wilbur	*	LA	1929			UCLA student, union member of sheet metal making factory	attorney and active Democrat during 1960s	RS
Sanbonmatsu, "Ike", Akira		NY	1929		communications instructor of Suny Brokport, charter member of AFL- CIO	organiaing efforts of labor union during 1930s	SUNY	RS
Iiyama, Chizu		NY, Chicago	1911			Japanese American Committee for Democracy, Chicago Resettlers Committee, core of NY NP		RS
Iiyama, Ernest		NY, Chicago				JACD member, core of NY NP		RS
Matsuda, Kimi		NY				grew up in Hawaii and witnessed Makawell Sugarcane Plantation labors, called to testify Hawaii Seven trial in 1951	Hawaii Youth Correctio nal Facility	RS
Matsuda, Don		Chicago						RS
Hiratzka Mizuno, Amy		NY	1922					RS
Kitano, Mary								RS
Kano, Richard				-				RS
Tsujimoto, Mitzi Tsujimoto,Richar d								RS RS
Komuro, Tom	*				editor of Crossroads			RS
Aoki, Helen		LA						RS
Saijo, Albert			1926					RS
Saijo Gompers								RS
Hata, Bill	*	LA						RS
Ishioka, Mae	*	LA		1	I		1	RS

RS=Rafu Shimpo 1997/12/11

Unquiet Nisei= Diana Meyers Bahr, *Unquiet Nisei: An Oral History of the Life of Sue Kunitomi Embrey* (New York: Palgrave Macmilan.2007)

〈収集資料・学会報告・論文など〉

これにかかわって以下の資料を収集した。

Rafu Shimpo 1997 年 12 月 11 日号 (サカエ・イシハラはじめ主要メンバーのインタビューを特集している)

Nisei Progressives 関係 (Southern California Library=南カリフォルニア公立図書館 所蔵資料)

- --Leaflet of January 18, 1949
- --Proposed Platform of the Nisei Progressives as Drafted by the Platform Committee and Presented to the Founding Conference for Consideration and Adoption
- --Proposed Constitution and By-laws of the Nisei Progressives as Drafted by the Constitution Committee and Presented to the Founding Conference for consideration and Adoption

この調査はカルチュラル・スタディーズ学会年次大会・カルタイ広島大会(於・広島女学院大学)において、「「二世プログレッシヴ」: 戦後北米における日系左翼の思想 Nisei Progressives: Japanese American left during the Postwar Period in the United States」として口頭報告をおこなった(2012 年 7 月 15 日)。

3 「日本文化」と日系三世たち、日本語学校

# 3-1宗教

日系アメリカ人における世代間の紐帯としての〈日本〉を検討する目的から、ロサンゼルス・リトル・トーキョー内にある東本願寺・西本願寺の開教師および信徒たちのヒアリングをおこなった。[2011/08/11, 2012/03/16-18]

## 〈調査研究上の前提〉

この分野でもすでに分厚い研究蓄積がある。そもそもアメリカ社会では日曜礼拝が市民 の義務とみなされる。そのため日系移民にとって教会は必須であった。そうした中で浄土 真宗には、日系移民の出自が西日本に集中していることから、日系社会内部で強い社会的 要請があった。

先行研究および北米における浄土真宗教団の布教活動については脚注を参照のこと12。

Yanagawa, Keiichi, ed. Japanese Religions in California: A Report on Research within and without the Japanese-American Community. Tokyo: Dept. of Religious Studies, University of Tokyo 1983

Charles Prebish and Kenneth Tanaka, eds. *The Faces of Buddhism in America*. Berkeley: University of California Press 1998

Shinran and America: Problems and Future of Propagation in America. Institute for the

〈本調査の成果〉

- 1) 東本願寺では以下のインタビューをおこなった。
- ① M・N さん(女性、1972 生) 富山県出身、開教使 大学院(静岡県立大)の修士論文執筆(日系人社会における真宗の役割)のため留学し、 その後、開教師となった。

(使用言語は日本語)

- ② R·S (男性、1950年生、三世)会社役員
- ③ D・I (男性、1951年生、三世) 大学職員 (いずれも使用言語は英語)

## 2)西本願寺

- ①B・W (男性、1950年生、アフリカ系アメリカ人) 開教使 東本願寺・開教師・M さんのお連れ合いで日本語は話せない。
- ・60年代にサンフランシスコで高校生活を送り、60年代後半の学生運動の過程で、生物学徒であったが仏教研究に転身。
- ② A·K (男性、1972年生、三世) 大学職員
- ③ J·K (女性、1956年生、三世)
- ④ H·K (男性、1944年生、三世) 歯科技師
- ⑤ S·K (女性、1968年生、二世)

(いずれも使用言語は英語)

東本願寺の開教師である M・N 氏によれば、真宗には、翻訳できない用語として、信心・ 凡夫・本願・阿弥陀などがあり、それが宗教的紐帯としての役割を果たしている。また、 東本願寺は二世を中心に建立され、現在も門徒の中心は二世である。毎水曜日に日本語の 講座、歎異抄の勉強会しており、これも二世が中心である。ただしインタビューをおこな った二人の日系男性は三世であり、三世も活動の中心になっていることがうかがえる(も っともこれは三世のインタビューをこちらが希望したからでもある)。

この点は、西本願寺の開教師である B・W の言葉からも裏付けられる。西本願寺の現在の活動の中心は三世世代である。インタビューした 4 人の日系男女の共通点として西海岸の大学を卒業し、大学関係、専門職関係についていることがあげられる。

Study of Buddhist Cultures, Ryukoku University, ed. Kyoto: Institute for the Study of Buddhist Cultures, Ryukoku University 1996

Duncan Williams and Christopher Queen, ed. *American Buddhism: Methods and Findings in Recent Scholarship.* London: Curzon Press,2002

Engaged Pure Land Buddhism: Challanges Facing Shinshû in the Contemporary World--Essays in Honor of Professor Alfred Bloom. Berkeley: Wisdom Ocean Publ.1994

日系アメリカ人であることを意識した契機として、R・S氏は、高校時代に差別経験があったことを泣きながら語られた。

6人の日系男女の家庭内では日本語は使用しない。ただし子どもたちに日本語を学ばせている家庭もある。教団への参加は「仲間をもとめて」である。西本願寺の場合には、開教師の B・W 氏との真宗の勉強会が楽しいとのことであった。これはみんなでワインを飲み、ピザをとっての法談=放談である。ここには B・W 氏のラディカルな真宗解釈もあずかっている。彼はアメリカのコンテクストで浄土真宗を伝えることに貢献したいと考えている。新旧の教えをどう区別しているかについていうと、伝統儀礼については、浄土真宗としての儀礼性を重んじる。同時に社会問題に対して開かれた教義を説く。実際、同性愛や若者の関心などを柔軟に説教にとり入れている。それゆえ葬式仏教としての日本の仏教には懐疑的である(曹洞宗、高野山、浄土宗、日蓮宗などに対して)。そうした説教にたいして、二世は保守的な態度をしめすが、三世は肯定的である。

以上のことから、日系アメリカ人たちが教団を必要とするのは、日系アメリカ人としてのエスニック・アイデンティティの共通性と、先に M・N 氏が語っていたような、翻訳不可能な信仰の言説を介した宗教的紐帯にあるといえよう。そしてそうした関係性を維持しつつ、アメリカ社会と共存するための工夫を開教師たちはおこなっている。

その他のトピックとして、2011 年お盆のお祭りで西本願寺の門徒・宮本信子さん作詞の Mottainai (「もったいない」) が披露された。これは2011 年 3 月 11 日の震災・原発事故以後の日本社会の動向に触発されたもの。英語の歌詞だが「もったいない」だけ日本語で歌われる。

なお収集資料は以下のとおりである。

2011 Bon Odori Dances(DVD, Mottainai 収録)

The Collected Works of Shinran volume 1,2

 $\it Higashi~Honganji~Buddhist~Temple,~Los~Angeles~Betsuin$ : Centennial Celebration  $1904 \cdot 2004$ 

Honpa Honganji Los AngelesBetsuin 本派本願寺羅府別院 1905・1980

Memories: The Buddhist Church Experience in The Camps, 1942-1945, Second edition その他、B・W 師の論文 (Betsuin Jiho に掲載されたもの、十数編)

# 3-2 県人会の活動

ここでは日系アメリカ人の文化的紐帯という観点から、県人会組織を中心に開催されている民謡協会大会を調査し、その中心人物 N 氏へのヒアリングをおこなった。[2013/3/25] ① N (男性、1936年生) 帰米二世 庭園業

(使用言語は日本語)

帰米二世としてのN氏はアメリカで生まれ、いったん日本に帰り、21歳でアメリカにもどった。鹿児島県人会に所属し、民謡協会の長い活動歴がある。日本で鹿児島商科大学を

卒業した N 氏は大学時代からバンドにかかわっていたが、バンド活動をはじめたのはアメ リカ社会に来て徴兵を終えた後の29歳になってから。徴兵時代はフォート・ベニングで、 ベトナム戦争に向けたゲリラ戦のための訓練にたずさわった。バンドでは司会から始め、 佐藤松豊さんに師事して民謡を学んだ(なおロス出身で鹿児島育ちの歌手の AI の家族も松 豊会に所属している)。日系社会における民謡協会の意味は、それぞれの流派が集まること のできる場所だということである。踊りの流派もいくつかあるが、民謡はより参加しやす く、まとまりやすい。沖縄県人会にも20ぐらいのグループがある。民謡協会は毎年2回集 まり、さらに西本願寺で紅白歌合戦も行っている。民謡が紐帯となるのは、「変えない」こ と、「日本でやっている通りにすること」が重要だからである。紅白歌合戦もその演目や構 成を変えない。形式を変えないことによって多様な出自の日系人がかかわれる。民謡協会 大会でも、踊りでは日系人だけでなく中国系アメリカ人の若者たちも参加しているが、日 本語で歌う民謡は日系人が参加しやすい。ほかのエスニック集団が参加すると上手か下手 かという基準が生まれてしまう。日本からゲストを呼ぶときも(美空ひばりや北島三郎を 呼んだことがある)、チケットを買うのは日系人である。こうして日系というエスニックな 境界を柔らかく保持することによって、競争のない関係を不断に維持するという効果が期 待されているといっていいだろう。なお N 氏の子どもたちについていえば、娘は奨学金を 取って民謡を学んだことがあるが、日本語のハンディがある。継承文化からみたときの困 難はある。

収集資料は以下のとおりである。

南加鹿児島県人会『創立百周年記念祝賀会』(June 6th, 1999)

Japanese Prefectural Association of Southern California 35 th Anniversary (Nov.1999) (南加県人協議会創立 35 周年記念)

南加鹿児島県人会創立百十周年 同婦人会創立百周年記念誌 (2009)

南加鹿児島県人史創立百周年記念(1999)

(南加鹿児島県人会は南カリフォルニア最大の県人会組織)

#### 3-3 日本語学校での調査:日本語学園協働システム・田中雅美学園長[2013/3/26]

同校は南カリフォルニア州で第二言語として日本語を教授する学校として知られている。1911年にロスアンゼルス第一学園として出発したこの学校は、日本人倶楽部から出版した。初代園長は留学生であった島田好平氏(戦中に強制収容所で死去)。現在の学校数は5校、生徒数は300人。毎週土曜日に開講。月額は65ドル/一人。教員は34~5人。カリキュラムは小中高成人で分かれる。小の部が200人(全体の75%)。25%が家庭でも日本語を話す日系人の子弟、25%がアメリカ人で日本文化に親しんでいる家族の子弟、残りの半数が日系人だが家庭で日本語を話せないので、継承言語として学ばせたいという家族。日系の家族が日本語学校に子弟を学ばせる理由は、バイリンガルとして育ってきた自分たちの経

験を踏まえて、そうした言語能力をつけさせたいと考えていること。ただしある調査にも とづけば、8割ぐらいは「無理やり」連れてこられ、10代になって自主的に学ぼうとする ようになるという。テキストについていうと統一した教材はない(かつては文部省の作成 したテキストを使用していた)。日本語スピーチコンテストも毎年開いている。学園として 定まった日本語教授法はない。それは、そうした教材・教育法をつくっても「帯に短し襷 に長し」だからではないかと田中氏は感じている。むしろ、日本に来る外国人に日本・日 本語を教えるテキストが段階的で一番いいように感じるとのことである。そうしたテキス トをそれぞれの先生が工夫しながら使っている試験的な段階である。

近年、日本の大学は海外からの入学者のための門戸を開こうとしている。依然として日本の大学に合格しても、北米の大学に合格したら、北米のほうを選ぶ場合が多い。とはいえ日本人・日系人の親たちは子どもたちにバイリンガルであることを期待している。そうした経済的なメリットがある。しかしそれ以上の意味があるのではないかと田中学園長は感じている。それは「日本文化」へのあこがれではないかと話された。そうしたニーズは常にあると感じているとのことであった。

## 4 アジア系アメリカ人としての現在

日系アメリカ人としてのアイデンティティとアジア系アメリカ人としてのアイデンティティの相違、相互の葛藤の検討のために、人権問題など共通の政治活動にかかわることでつながっている二人からヒアリングをした。[2013/09/11-13]

- ① M・N (男性、1936年生、三世)著名なアクティヴィスト。
   60年代後半に UCLA の Asian American Alliance の学生によって創刊されたニュースペーパーGidra[1969-1974]の寄稿者でもあった。
- ② S·M (女性、1949年生、三世) メンタル・スクールのセラピスト。

UC サンタバーバラ校時代からアジア系アメリカン人のコミュニティで活動し、現在も受刑者の社会復帰、政治犯救援運動などにたずさわる。

# (いずれも使用言語は英語)

著名なアクティヴィストである  $M \cdot N$  氏の父は、シアトルで育ち木こり [lumperjack] となり、そこで九州を出自にする家の出である女性 (M org) と結婚しロサンゼルスに来た。大戦中はサンタ・アニタに収容され、そこで日系人たちの暴動を目撃している。戦後は徴兵され、そのあと公民権運動やブラック・パンサーの運動と出会い、日系社会で政治活動を始めた(なおこれらの家族背景については Yushi Yamazaki 氏から提供いただいた Interview by Laura Pulido on May  $7^{\text{th}}$ , 2000、にもとづく)。70 年代には日本を訪れ、広島や三里塚闘争の活動家たちとも交流している。その後も数回日本を訪問している。共産主義者であり政治活動家としての  $M \cdot N$  氏は、エスニック・ナショナルな立場からアイデンティティを語るのではないが、日本や日系の歴史から「民族と階級」という問題にこだわっている。そしてその立場から「リドレス」に対しても批判的である。

M・N氏に対して、S・M氏のアイデンティティはアジア系アメリカ人であることに置かれている。その帰属意識についてインタビューで次のように語っている。

「1966年に大学に入学したころ、アジア系学生はまだ少なかった。黒人学生といっしょにアジア系学生のコミュニティができあがった。制度的な人種差別があり、教育プログラムにとりくんだ。1967-68年のころは、インターナショナルハウスで国際学生との関係のほうが居心地はよかった。大学でマイノリティとしてのカルチャーショックを得た。私たちは大学にいった最初の世代で不利なバックグラウンドをかかえていた。日系アメリカ人はほかの移民とは異なり、同化傾向が強かった。強制収容所を経験し、二世たちは世俗的で、三世はほかの選択肢がなく。どうやって闘うか、サポートがなかった。

しかし同時にベトナムや公民権運動にめざめはじめた。同時期にドラッグ中毒が日系コミュニティでひろがっていた。16歳の少年がで心臓発作で亡くなって事件になった。なぜ若者たちが疎外されているのか。ドラッグに手を出すのか。日本人は恥だと思って公に議論しなかった。日本文化は内省的で率直ではない。サンタバーバラの学生たちはそうした問題にとりくんでアジア系アメリカ人の研究をはじめた。私たちはアジア系アメリカ人の研究コースをもとめた。すべてのステレオタイプと闘うような闘争。黒人研究やチカーノ研究があってもアジア系アメリカ研究はなかった。

日系アメリカ人教員は私たちに反対した。社会学の教授。学部のサポートがなかったので、私たちが自分でつくらなければならなかった。本も先行研究もなく。強制収容所に関するいくつかの本があっただけ。

その後、1969年からはじまったキューバ革命との交流プログラムに参加。キューバで三ケ月暮らし、さとうきび労働に従事。フロリダのキューバ人コミュニティ。社会主義とはどんなものかを知る目的もあった。キューバの日系人を介して沖縄にも関心が向くようになった。私の名前からしても父親は沖縄系。それを父にキューバから帰ってから聞いた。

1970年にはキューバはソ連に支援されていたけれど、2001年には観光化されていた。でもその精神は生きていた。まだカストロと社会を信じていた。ある日系キューバ人の女性は親戚がカリフォルニアにいて。でもその女性にとってはキューバがどんなに大変でも故郷だと。その精神は商品化されていない。私たちはアメリカの政府を信じていないけれど。

1965年の移民法改正のあとアジア系はたくさんきた。移民はコミュニティを強くするが 日系はちがう。中国系もフィリピーノも新しい文化がはいってきて、アジア系コミュニティも変化している。多様化している。日系コミュニティとは?孫はイタリア系だし、夫は 中国系アイルランド人。

アジア系コミュニティのイシューでは、メンタルヘルスという課題が大変だと思う。主流も傍流もどちらのコミュニティでも同じだけど、ドラッグ中毒がひろがっている。日系アメリカ人は同じ問題をアメリカ人とかかえている。日本に行くと居心地がいいけれど、何かが違うと思う。メンタルヘルスについては、日系ではスティグマになる。多くの抑圧がある。日系アメリカ人家族はしばしばストイックだけど、この社会はそうじゃない。そ

れで精神障害になるひともいる。R・N (日系の受刑者) は殺人を犯して 35 年刑務所にいるけれど、彼は変わろうとしている。彼の事件は産獄複合体のケースともいえる。彼は政治犯なのよ。刑務所で何が起きているかはとても重要。カリフォルニア州にはたくさんの刑務所がある。45 パーセントの囚人はドラッグ中毒。アジア系アメリカ人コミュニティでは、自分たちを代表できない集団もいる。太平洋の諸島の出身者など」。

S・M氏の場合には、主に1960年代の政治的経験からアジア系アメリカ人としてのアイデンティティを不断に「選びなおしている」といっていいのではないだろうか。その際に日本・日本語とのつながりが参照され、それはあくまでアジア系アメリカ人としてのアイデンティティの一部だということが確認されている。いいかえれば、日本・日本語はそうしたアイデンティティを「選びなおす」ときの媒介、時に否定的な媒介となっているといえる。

なお、S・M 氏の現在の活動であるドラッグ中毒者へのケアというテーマに付随して、ロサンゼルス最大のスラムであるスキッド・ロウ[Skid Row]のホームレスの日本人(男性、1945 年生)の聞き取り調査も並行しておこなった。[2013/09/11]これについては以下の短文で紹介した。

『磯江通信』第 16 号(2014/02/20 発行)

# 韓国調査報告

「在日」留学生を中心としたソウル在住日本語話者のコミュニティ

東京外国語大学国際日本研究センター 前田達朗

要約;ここでいう「在日」とは在日朝鮮人、在日コリアンなどとも呼ばれる、オールドカマーのことを指す。70年代以降に本格化した韓国への「母国留学」は、「在外僑胞」を取り込もうとする韓国の国策と、それに追従する韓国系民族団体の後押しもあってほぼ途切れることなく続いてきたが、87年の「民主化」以降、急激にその数をのばした。その数の増減は日韓関係や韓国内の情勢を投影しているといえよう。このことはすなわち「日本人」ではない日本語を母語とする集団が韓国内に存在し続けていたことになる。また韓国は長らく「日本語学習者数」が最大の地域であった。在住する日本人も様々な階層が存在する。こういったことから本研究の主旨にてらし日本語が「紐帯」として機能しているか、果たしているとすればどのような機能かを検討しておく必要があると考えた。今回とりあげたのは、「在日」留学生を母胎としたいくつかの集団のうち、野球チームである「B」である。筆者は 2006 年から参与観察とインタビューを行っている。

Bは 1976年に創設された。調査開始当時は 30 名程度の集団で、「在日」、日本人、日本 育ちの韓国人で構成され、学生がほとんどであったが、社会人も若干含まれていた。B に参 加するための条件は野球に興味があることよりも、日本語を母語として使えるかどうかだ った。このことは参加を希望してきた韓国人をそのことを理由に断っている事例から観察 できた。「在日」以外の属性の者を受け入れだしたのは 2004 年頃からだと記憶されていた。 「在日」の彼らが日々直面する韓国社会や韓国人への不満を共有できる場であった。しか しその後大きく構成メンバーの変化がおこる。試合をするためのメンバーが不足すること が何度かおこり、この「日本語ルール」は緩められ、2009 年以降韓国人日本語学習者がメ ンバーとなる。「日本語を話せる者の集まり」であったことをメンバーは意識していないか もしくは否定する。韓国人でも日本語を全く解さないものがメンバーとなることはその後 もなかったにも関わらず、そのことが加入の条件だと考えられてはいなかった。またこの 「在日」の集団の核をなしていた「国際教育院」出身者であるが、その「教育院」のソウ ルからの移転(2009)は、「在日」留学生の流れに大きな変化をもたらした。教育院の同期 が韓国語教育を経て大学進学をする際に、所属する大学を超えて続いた関係性を構築する ことが不可能になった。「在日」留学生の把握が困難となり、直接大学附属の語学学校(語 学堂)に通うもしくは語学教育の一年だけで帰国する学生が主流となり、メンバーの維持 が困難になる。2011 年を最後に B の活動は休止する。2012 年には、他の「在日」の留学 生の集まりも解散したことが確認されている。「在日」、日本語母語話者、日本語母語話者+ 学習者とメンバー維持のために変化してきた参加資格であったが、対応できなかった。しかしながら、ほぼ意識されなくとも最後まで「日本語」が参加の要件であったことは間違いない。ただこれが「紐帯」であったかどうかはさらに議論する余地があると考える。言語そのものが、あるいはそれだけで「紐帯」であることは難しいと考える。

#### 1. 調査の概要

- ·調査時期 韓国調査 2011年7月、2012年3月、2013年5月
- ・調査対象 「B」在籍者および在籍経験者のべ40名
- ・調査方法 聞き取りおよび参与観察。補助的に文献調査

科研による調査以前から関係があり調査をしていた。以前は「在日」の朝鮮語獲得の方法としての留学についての研究を主眼としていたが、この集団が日本語話者であることで成立していることがわかってきた。この科研全体のコンセプトの着想点のひとつもこの集団にある。調査は主に参与観察とインタビューである。補助的にこの科研による調査以前に行った調査票調査と文献調査の結果も用いる。

## 2.背景

「母胎」ともいえる「在日」の留学生について概括する。正式な「国交」の回復までは、韓国教育部(文部省に相当)の記録は残っていない。李(1971:275)によれば1962年からの記録がある。韓国教育科学部によれば80年頃から正規留学・語学留学・短期留学などを含めると1000人前後で推移していたが、87年の民主化を契機に2000人程度に増える。韓国に何度かおこった政変や「留学生スパイ事件」の後などは、女子に顕著な人数減が見られるのが特徴である。入手した統計では2000年のおよそ4000人をピークに漸減傾向にある。これらの理由としては韓国留学がその後の仕事に結びつきにくい現状、入学時に優遇(募集人員が別枠、試験が容易)されるものの、入学後に手当が少なく卒業が困難であること、韓国社会への不適応などがある。また親の世代交代も考えられる。

1968 年にソウル大学在外国民教育研究所が設立され、70 年までに 124 名を大学に進学させている。77 年在外国民教育院が設立されると、92 年に「国際教育振興院」(以下振興院)に改組される。二学期制をとっているが、韓国内の他の小学校から大学までの通常の学期(3 月と 9 月に新学期の二学期制)とはことなり、4 月始まりになっている。考えられるのは、この機関の最初の役割は「在日」に対する教育であり、日本の学年度に合わせたということである。現在は北南米や様々な地域からやってくる「在外僑胞」であるが、長い間「在日」のことをさしていたことがわかる。このように「国策」として在外僑胞の「母国修学」はすすめられたが、一方でこの「振興院」は軍事独裁政権時代は KCIA の管轄であった。彼らは監視対象でもあったわけである。また韓国系の民族団体も積極的に「母国留学」を後押ししており、留学生の中にはこういった民族団体関係者の子弟が多く含まれている。またこの「振興院」での共同生活を通じて同年代の留学生がコミュニティを形成

し、大学進学後もその関係は続く。しかし 2009 年この「振興院」がソウルから全羅北道に移転する。「在日」留学生コミュニティの一つのコアがなくなり、またソウル在住の留学生も四年制正規課程への進学から一年程度の短期の学生が増え、個人的な関係が中心となり、「組織率」が大きく変化した。

日本人の留学生の数が増え出したのは 90 年代に入ってからである。こちらも同様に韓国内の情勢に敏感に反応したといえるが、いわゆる「韓流」の影響は見られない。

#### 3.調査から見えてきたもの

本研究で中心に据えたのは、彼らの中で日本語は「紐帯」として機能しているかどうか という一点である。実態として日本語母語話者の集団であったのだが、それそのものには 彼ら・彼女らは意味を見いだしていなかった。加入の条件が日本語母語話者であることが わかったのは、韓国のスポーツ事情とも関連するが、野球をやりたいとやってきた韓国人 学生を複数回断っている場面を観察したからである。後にその断った当事者にインタビュ ーした際にも本人は断ったことは覚えているものの、日本語が条件だとは考えなかったと 言う。もちろんその集団は程度の差はあれ韓国語の能力はあり韓国人のメンバーがいたと してもコミュニケーションに困ることはなかった。彼らとの話の中から、そして観察の中 から見えてきたのは、B は日々向き合う韓国人や韓国社会への不平や彼らが感じる理不尽さ を共有する場であったということである。彼らの留学を後押ししたのは日本社会に於ける 彼らのマイノリティ性であることは間違いないのだが、韓国に来て新たに突きつけられる 彼らのマイノリティである立場は、同じ日本語話者である日本人メンバーや「在日」では ないが日本での生活経験の長い韓国人メンバーとは共有できるが、韓国人とはそれが不可 能なのだ。その他にも同年代である、野球ができるなどの若者ならではの共通点はあるが、 メンバーが苦しくなってから加入してきた韓国人日本語学習者は、共有はできないが理解 できる可能性がある者として受け入れられたと考える。これはある種の妥協であるが、そ の際も日本語がひとつの指標であったといえる。

#### 4.結語

2013 年現在 B は活動休止中である。再開の見込みはたっていない。その他にいくつか存在していた彼らが「サークル」とよぶ「在日」留学生を中心とした任意団体も活動休止や解散が言われている。それぞれのサークルにはもちろん OB・OG が存在するのであるが、これらの傾向が「振興院」の移転や留学を取り巻く状況にあるのか、留学生自身の意識の変化によるものかはさらに研究が必要だが、本研究の主題である「日本語は紐帯として機能しているか」ということについては、日本語そのものが、あるいは日本語だけがこの B の「在日」と日本人、そして後には日本語学習者をつないだものではない、ということは言える。同じ時期にソウルでであった者同士が「紐帯」を感じるのは、マジョリティである韓国人ではないという点であった。言語そのものだけを取り出して、言語の機能として

彼らのつながりを評価してしまうと、言語が持つ可能性のある「紐帯」としての機能を見 誤る可能性がある。言語がその機能を果たすためには、なんらかの別の要因が必要である というのが、現状での結論である。

# 奄美調査報告

日本統治期台湾に居住経験を持つ奄美出身者とそのことばについて

東京外国語大学国際日本研究センター 研究員 高嶋朋子

#### はじめに

本稿は、「〈紐帯としての日本語〉日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」の生活言語誌研究」(科学研究費補助金(基盤研究(B))、課題番号 23310176)の一環として行った、日本統治期の台湾に居住経験を持つ奄美出身者を対象とした調査の報告である。

筆者は、周縁として位置づけられてきた「奄美」という地域の出身者のなかで、特に「外地」に居住した経験をもつ者に突きつけられたことばによる紐帯に関心を持ち、今回は台湾に居住経験がある奄美出身者に限定して、関係史料調査及び聞き取り調査を遂行した。

#### 調査概要

#### • 史料調査

2011 年度は7月と2月、2012 年度は9月と3月に、鹿児島県立図書館、鹿児島県立奄美図書館、奄美市博物館、奄美大島教育会館で史料調査を行った。鹿児島県と大島郡の人口統計書などの基礎資料に加え、奄美市立博物館所蔵の芝田義則史料と奄美大島教育会館所蔵の大島教育会関係の新出史料を確認した。

## ・聞き取り調査

2011年度は7月と2月、2012年度は9月と3月に、鹿児島市で2名、奄美市で2名、瀬戸内町で4名の合計8名に対して実施した。瀬戸内町のインフォーマント2名は高齢だったため、1度の調査にとどまったが、他の6名には複数回の調査を行い、時間をかけて詳細な話を聴取した。

# 調査報告

・近代における奄美から台湾への人的移動

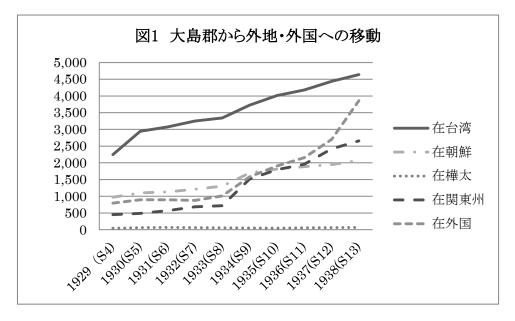
近代における奄美群島出身者の「外地」での活動については、例えば、南日本新聞社編『与論島移住史——ユンヌの砂』(南方新社、2005年)に与論島から満洲への移民が取り上げられているが、総体的にみて研究の蓄積は非常に少ない。

明治から大正期の爆発的人口増加13と地域内産業の零細性という問題を抱えた奄美群島

<sup>13</sup> 皆村武一『奄美近代経済社会論』(晃洋書房、1988年)によれば、奄美地域は幕末から明治にかけて増えてきた人口が、更に爆発的増加となって大正まで続いた。1824年に80,000人弱だった人口は、1920年には230,000人超まで増えたとされている。なお、この

からは、人口流出が途絶えることはなかった。特に、1920 年代からは阪神地方を目指し、工業地帯で就労する男性や紡績女工として働く女性が非常に多かった。現在、奄美群島出身者及び二世・三世らの阪神地域居住者は、200,000~300,000 人いるといわれている。そのため、奄美群島からの人的移動をテーマにした研究は、この阪神地域がフィールドの中心である。

しかし、本研究プロジェクト開始前に行った聞き取り予備調査では、奄美から台湾へ移住した人々が多かったという証言を複数得たため、本調査段階で統計資料を確認していった。1895年から日本の統治下におかれた台湾には、1931年時点で250,000人余の日本人が居住していた<sup>14</sup>。在台日本人人口は当初から西日本出身者が多く、『台湾総督府 第三四統計書 昭和五年』(台湾総督府民政部文書課、1332年)によれば、同年に渡台した日本人のうち九州出身者は44.7%に達しており、そのうち鹿児島県出身者は全在台日本人の6%を占めていた。鹿児島県全体からの渡台者は台湾総督府の統計資料から容易に確認できるが、奄美群島が包括されていた当時の行政区分である大島郡から「外地」への人口移動を総じて通時的に把握するデータは不足している。但し、現存する1929~1938年の『大島郡勢要覧』所収データによれば、大島郡から「外地」・外国への移動のなかで、渡台者は最多であり、また年々増大していたことが明白である。



各年『大島郡勢要覧』より作成

郡外に居住した奄美群島出身の同郷者のための月刊誌『奄美大島』の1926年9月号には、 各地在住の同郷者数について以下のような記述がみられる。

現象には他地域からの人口流入は無関係で、自然増によるものだった。

<sup>14 『</sup>台湾総督府統計書 第三五統計書 昭和六年』(台湾総督府民政部文書課、1333年)。

(前略)最近本社が各地在住有志に徴した見込み数の主なものを見ても、大阪府三万、鹿児島県一万三千、兵庫県八千、東京府七千、福岡五千、台湾五千、長崎四千、沖縄二千、朝鮮二千といふ概数を示して居るからである。15

『奄美大島』では同郷者が多い大阪、東京などの特輯号が刊行されることがあったが、 台湾特輯も2度3号にわたって組まれている。このように、近代の大島郡からは、「内地」 においては阪神地域、「外地」においては台湾への人口移動の傾向があったことが覗える。 またこうした傾向のなかでも各島ごと(厳密には、各シマ(集落)ごと)に特徴があり、 例えば、沖永良部島警察署によって作成された「昭和一六年 管内一般概況情勢」16などで 確認すると、沖永良部島からは阪神地域に出て行ったケースが多く、台湾行きは非常に少 なかったようだ。対して、奄美大島南部及び加計呂麻島出身の渡台者は多く17、本調査で行った聞き取り調査の対象は、当該地域出身者が中心となった。

奄美から台湾への人的移動に関する調査成果は、「大島農学校をめぐる人的移動についての試考」(『日本語・日本学研究』vol.3 東京外国語大学国際日本研究センター 2013年)、「近代における奄美群島からの渡台者について」(『交錯する知 衣装・信仰・女性』思文閣出版 2014年)として発表した。

#### ・台湾居住経験を持つ奄美出身者のことばに関する証言

上記したように、奄美では多くの人々が仕事を求めてシマを離れた経験を持つ。奄美から「内地」へ移住した人々や出稼ぎに出た人々の経験は、「シマグチ(集落のことば)を話したら馬鹿にされる」、「「標準語」を話せないと仕事先で困る」といった言説として持ち帰られ、奄美の「標準語」励行に拍車をかけたことが先行研究で明らかにされている<sup>18</sup>。では、「内地」以上に「国語」の推進が焦点化された「外地」に居住した奄美出身者はその「外地」で、また引揚げ後、米軍占領下の奄美や、「内地」の居住地で、どのような言語経験をしたのか。この点を重視しながら聞き取り調査を行った。

インフォーマントは、両親が奄美出身の日本統治期台湾居住経験者 8 名で、今回は全員が奄美大島または加計呂麻島出身者に限定された。各インフォーマントの性別、生年、渡台の経緯や引揚げ後の居住地といった簡単な概要は、以下の表のとおりである。

<sup>15 「</sup>巻頭語 大阪の同胞」(『縮刷版 奄美大島 上巻』、奄美社、1983 年(『奄美大島』 九月特輯大阪号 大正一五年九月一日発行))92 頁。

<sup>16</sup> 鹿児島県警察部情報室「大島熊毛地方各署管内概況」『新居善太郎関係文書』資料番号 507、国立国会図書館憲政資料室所蔵、1941 年

<sup>17</sup> 与路島からの渡台も多かったという証言がある。

<sup>&</sup>lt;sup>18</sup> 前田達朗「「経験」としての移民とことば 「奄美人」とシマグチを事例として」(『ことばと社会』12号、2010年

	性別	生年	出生地	台湾当時の居住地	渡台の経緯 引揚げ先居住地
Α	女	1927	サイパン	高雄	1931年に父が高雄州の郡役所に転職 1946年に引揚げて奄美
В	女	1913	奄美	苗栗	1933年に在台の製糖会社勤務の奄美出 身男性と結婚したため 1946年に引揚げて奄美
$\mathbf{C}$	男	1922	奄美	台北	1937年、高等小学校卒業後に台湾の夜 1941年頃に引揚げて福岡 間学校に進学
D	女	1932	嘉義	嘉義	湾生 父が農学校教員 1946年に引揚げて鹿児島
E	男	1937	奄美	嘉義	湾生 父が製糖会社勤務 1946年に引揚げて奄美
F	女	1935	台中	台中	湾生 父が警察官 1946年に引揚げて奄美
G	男	1934	新竹	台北	湾生 父が警察官 1946年に引揚げて奄美
Н	男	1937	花蓮港	花蓮港	湾生 父が公学校教員 1946年に引揚げて鹿児島

A、D、E、F、G、H o 6 名は、台湾で小学校生活を送っており、全員が学校でも家庭でも「標準語」で話していた。この 6 名のうち、家庭内で両親がシマグチで話しているのを聞いたことがあったのは F だけで、ほとんどがシマグチの存在すら知らなかった。A は幼稚園から女学校、そして就職後の 1946 年に引き揚げるまで台湾に居住したが、家庭の都合で数ヶ月だけ、母親の郷里がある奄美大島南部の小学校に通ったことがある。当時を振り返って、同級生のことばが全く理解できずに困惑したと証言している。高等小学校卒業後に台湾で働きながら進学した C は、台湾に行ってからことばで困ることはなかったかとの問いに、「最初のほうはまぁそういうあれがあったけど、台湾に行って日本語がちゃんと使えるようになったですよ」と答えており、当時の奄美の言語状況が推察できる。

奄美での「標準語」励行が、厳密にいつからどのように推進されていったかを示す史料はみつかっていない。しかし、1944年に各学校が「標準語」励行の取り組みをまとめて当時の大島教育会に提出した報告書が現存しているほか、先行研究によって、少なくとも加計呂麻島にある複数のシマの小学校で行われた、1935年頃から 1949年頃までの「標準語」励行活動が確認されている $^{19}$ 。E、F、G の 3 名が台湾から引揚げて奄美の学校に転校した 1946年当時は、「わるいことば」であるシマグチは排斥され、「きれいなことば」である「標準語」が励行される渦中だった。A は 19 歳で奄美に引揚げた後、小学校教員になり、「台湾育ちでことばがきれいだったから」児童の「標準語」指導を任されたことがあったという $^{20}$ 。実際、シマグチを話した児童は教師に叩かれたり、学校で飼っていたヤギの餌を山に取りに行かされたりという罰が与えられていたが、「標準語」しか話せない台湾引揚げ児童はそうした罰を与えられることはなかった。しかし、休み時間や放課後、みんなで遊ぶ時にはシマグチがわからないと仲間に入れてもらえず、「あらくだりやまとっちゅ」と呼ばれて意地悪をされることもあった。また、子供たちが喜んで参加する地域文化行事もシマグ

\_\_\_

<sup>19 『</sup>話言葉普及徹底二関スル件』奄美大島教育会所蔵、ハスンゲルン「昭和期の奄美における標準語教育の実態」『平成 19 年度 加計呂麻方言調査報告書』鹿児島大学

<sup>20</sup> 引揚げ先の鹿児島市内の小学校に転校した H は、「標準語」が上手いことで表彰されたことがある。当時の奄美だけでなく広く鹿児島県下で、「外地」からの引揚げ者のことばがきれいだという言説があり、県の教育雑誌などにもこうした記述がみられる。

チと密接であるため、何が行われているのかよくわからず、シマ育ちの子供たちのようには楽しめなかったという。結果として、「きれいなことば」しか話せない台湾引揚げ児童は、 懸命に「わるいことば」であるシマグチを覚えることで、シマの社会に参与していったのである。

このように、本聞き取り調査によって、1930 年代ごろから復帰21前後までの奄美におい ては、「国語」や「標準語」ということばによる紐帯が強いられたことだけでなく、当時の 地域社会を形成する人々を紐帯したシマグチということばの存在も大きかったということ が、浮かび上がってきた。しかし、ふたつのことばによる紐帯が及ぼす影響は必ずしも画 一的ではなく、各人の来歴や立場によって、または時々の場によって異なった。例えば、 シマでは「きれいなことば」と受け取られた台湾引揚げ児童の「標準語」は、決して「正 しい標準語じゃなかった」と G は語った。G が台北で小学生だった頃、東京から来た転校 生が「ラジオから聞こえてくるようなことば」を話すため、みんなで笑ってばかにしたこ とがあった。「それはつまり、自分達が話していたことばはラジオから流れてくるような正 しい標準語じゃなかったんですよ。台湾で特定の地域の方言を聞いたことがあるかという と、そういうおぼえはないんだが、標準語みたいなことばだけど標準語じゃないことばを みんなしゃべってたですね」と証言した<sup>22</sup>。F は、シマグチを理解できるようになっても、 複雑な敬語については習得できず、年長者と話す際の受け答えは標準語だけだったと述べ た。こうした F 同様の証言をした E は更に、「日本語も中途半端、シマグチも中途半端だか ら自分が何語を話しているのか。よく考えたら何語でもなくてなんだかいろんなことばの 寄せ集めなんでしょうね」と語っていた。こうした証言からは、ことばによる紐帯が幾重 にも連なって存在していることがみえてくる。G や F、E の証言からみえる言語観について、 もう一歩踏み込んだ聞き取り調査を遂行する機会を得たい。

また、本調査を発展的に継続させる意味では、1950~70 年代における奄美の「標準語」励行についても明らかにしていく必要がある。奄美の高校を卒業した F、G は、その後教員になった。彼らが教職に就いたのは、復帰してすぐの頃になるが、復帰後というのは「標準語」励行が改めて盛んになった時期である。米軍占領下では、奄美群島居住者のなかだけで教員を供給してきたが、復帰後に鹿児島県下の他地域から奄美に教員が赴任するようなると、改めて「標準語」励行という名のシマグチ排斥が激しくなった。自身が児童や生徒だった頃、「標準語」が励行されるなかを逆行するようにシマグチを習得した彼らが、後に教員としてシマグチを排斥する一端を担ったという点に着目する意義は大きい。

<sup>&</sup>lt;sup>21</sup> 1945 年 9 月 2 日以来米軍政下に置かれていた奄美群島は、1953 年 12 月 24 日に日米間 の復帰協定が調印され、翌 25 日に日本へ「復帰」した。

<sup>&</sup>lt;sup>22</sup> 既に述べた通り、当時の在台日本人には九州出身者が多く、台湾で話されていた「国語」に九州方言の影響が大きかったことが先行研究で指摘されている。(例えば、簡月真著・真田信治監修『台湾に渡った日本語の現在―リンガフランカとしての姿―』(明治書院、2011年)など)

# ドミニカ共和国調査報告

ドミニカ共和国における日系人の日本語使用の実態について

国立民族学博物館 外来研究員 窪田暁

はじめに

ドミニカ共和国(以下、ドミニカ)の日系人については、これまでJICA などの国際協力における日本語教育の現場での関心はあったものの、研究対象として言語使用の実態を調査したものはない。しかし、人類学の調査をドミニカで実施し、現地に暮らす日系人(1世)と接するなかで彼らの故郷への意識と言語使用との関係に関心をもつようになった。また、国内のドミニカ系コミュニティでの調査では、日本に働きに来ている日系ドミニカ人(2世・3世)の言語使用が、移民のおかれている社会的状況に影響を受けていることが明らかになってきた。

このような問題関心のもとに、本プロジェクトでは、ドミニカにおける日系人の言語使用や言語習得の現状を把握し、国内の2世・3世を含めた、移民にとっての言語の存在を故郷との紐帯という視点から調査を実施することにした。

具体的には、以下の課題を設定して現地調査をおこなった。

- 1) ドミニカで暮らす日系人の言語使用や言語維持の状況について調査をして、実態を把握する。
- 2) 日本国内の日系ドミニカ人に対する調査を継続し、彼らの故郷認識を言語使用の意識 調査から明らかにする。
- 3) ドミニカ、日本にわかれて暮らす家族への聞き取り調査を実施し、紐帯としての日本 語という視点で分析を試みる。

こうした課題を明らかにするために、ドミニカでの現地調査を 2 回実施し、日系人に対して聞き取り調査をおこなったが、本稿は、その調査結果をまとめたものである。次節以降では、まずドミニカの日系人の概要について説明し、言語使用の実態についての調査結果を記述し、考察をおこなう。

# 1. ドミニカの日系人について

日本からドミニカへの移民は 1956 年 7 月の 28 世帯 185 人を皮切りに、その後の 3 年間で計 249 家族 1,319 名が農業移住者として入植した。そのほとんどが、日本政府が配布した移住者募集要項にあった「300 タレア(18 ヘクタール)の土地が無償譲渡される」という文言を信じて応募した人たちだった。しかしながら、実際には、三分の一程度の面積が

与えられたに過ぎず(所有権ではなく、耕作権のみ)、その地質も石ころだらけの耕作に 適さないものであったという。

1961年に、日本人受け入れを推進した独裁者トルヒージョが暗殺されると、政情不安のなかで、日本人に対する略奪などがはじまり、これを機に集団帰国や他国への再移住を決意する家族が出現した。翌年までに、計133家族611人が帰国し、70家族193人が南米へと移住した。その後、日本政府とのあいだで話し合いを重ねたものの、一向に当初の約束が履行されなかったために、2000年に日系人125人が日本政府を約束不履行に関する損害賠償を求めて提訴する。2006年、一審判決で国の不法行為は認定されたものの、時効により損害賠償の請求権は却下された。控訴審において政府が小泉首相の「遺憾の意」表明を含む和解案を提示し、遺族らに一時金を支払うことで合意にいたった。2007年3月の時点で、277戸849名の日系人がドミニカに居住している。

1990年に入管法が改正され、日系人の就労条件が緩和されると、ドミニカに残留した日系人の2世を中心に、日本への出稼ぎがはじまる。その多くは、神奈川県の工業団地で働き、現在は100人あまりの日系ドミニカ人とその配偶者・子女が生活をしている。

## 2. 日系人の言語使用の実態

ここでは、本プロジェクトによる現地調査について報告する。

#### 1)調査の概要

#### 【2011年度】

調査時期:平成 2012年2月9日~平成 2012年3月2日

調査地:ドミニカ共和国サント・ドミンゴ市、ハラバコア市、ボナオ市

調査対象:ドミニカ日系人協会、日系人14名

# 【2012年度】

調査時期: 平成 2012 年 12 月 25 日~平成 2013 年 1 月 6 日

調 査 地:ドミニカ共和国サント・ドミンゴ市、ハラバコア市、ボナオ市

調査対象:ドミニカ日系人協会、日系人6名に対する継続調査

調査は、1世とその家族を中心に実施し、方法はアンケート用紙を使った対面式のインタビュー調査でおこなった。調査結果を日本語とスペイン語の能力に分けてまとめたものが以下の表である。また、言語使用の実態は、1)1世は日本語を保持しているが、書く機会が少ないために文字を忘れているものが多く、スペイン語の習得がおもに会話中心になされたために、スペイン語を書けない人が多い、2)1世の言語能力は移住時の年齢、職業、家庭環境によって異なる、3)1世の日本語は、移住まえに習得したものと日系コミュニテ

ィで使用する範囲で保持されている、4) 1 世の日本語継承への意識は高いが、2 世はドミニカ人との結婚で、日本語を使用する機会が減少しているために、日常的にスペイン語が使用されることが多くなっている。また、2 世は機能的な面でスペイン語を選択しているのが現状である(日本語の使用は親との会話のみ)という結果であった。

調査では、基本的な質問項目にくわえ、1世から2世への言語継承についてその意識とあわせてインタビューを実施した。子どもには日本語を通じて日本人であることを確認して欲しいとの意識は多くの1世から聞かれた。その意識は、日本語教育に対する取り組みに表れている。子息への日本語教育は、1世の移住後すぐに各入植地(ダハボン、ネイバ、コンスタンサ、ハラバコア、首都サント・ドミンゴ)で自発的にはじまった。教師は、1世のうちで比較的時間に余裕のあった主婦が担っていた。1990年には、日本語学校が設立され、JICAボランティアなどの日本語教師が派遣されている。日本語学校は週に1回ないしは、平日の午後に開校される。

このように 1 世の言語継承への意識は高く、家庭内での会話は日本語だけを使用する家族がほとんどであったが、1 世の高齢化が進み(平均年齢は 69 才)、2 世・3 世の多くがドミニカ人との結婚やスペイン語との接触によって日本語が維持されなくなっており、言語継承の意識と現状には差がみられた。また、言語継承の場が家庭での日常会話に限定されており、コミュニティでの会話も 2 世間ではスペイン語が中心となっていることも日本語の継承が進んでいない原因となっている。3 世は母語がスペイン語である場合がほとんどで、祖父母である 1 世との会話でしか日本語は使用されずに、挨拶や呼称などの象徴的な場面での使用にとどまっている。

日系人の言語能力	:調査時期2012:	年2月					
	T. 日高	日高Jr.	T. 浜田	中川	立山	浜田トキ	K. 高田
調査時の年齢	69	46	64	62	71	90	19
移住時の年齢	16	ド生	9	8	16	38	ド生
母語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	ス
移住時の日本語能力	話す、聞く〇〇		話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	
	読む、書く〇〇		読む、書く〇〇	読む、書く〇〇	読む、書く〇〇	読む、書く〇〇	
現在の日本語能力	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く △△	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く ××
	読む、書く 〇△	読む、書く △×	読む、書く 〇△	読む、書く △×	読む、書く 〇△	読む、書く〇〇	読む、書く ××
現在のスペイン語能力	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く △△	話す、聞く〇〇
	読む、書く 〇×	読む、書く〇〇	読む、書く 〇△	読む、書く 〇×	読む、書く 〇×	読む、書く -	読む、書く〇〇
		両親は日本人					父日、母ド
	松永	Sr. SETO	Sra. Seto	宝代	立山カズヨ	立山サチコ	浜田ケイコ
調査時の年齢	75	69	69	57	46	35	22
移住時の年齢	20	17	17	4	ド生	ド生	ド生
母語	日本語	日本語	日本語	日本語	日本語	ス	ス
移住時の日本語能力	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇			
	読む、書く〇〇	読む、書く〇〇	読む、書く〇〇	読む、書く ××			
現在の日本語能力	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く △〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く △△	話す、聞く〇〇
-	読む、書く 〇×	読む、書く 〇△	読む、書く〇〇	読む、書く △×	読む、書く 〇△	読む、書く △△	読む、書く △△
現在のスペイン語能力	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇	話す、聞く〇〇
	読む、書く 〇×	読む、書く〇〇	読む、書く 〇△	読む、書く〇〇	読む、書く〇〇	読む、書く〇〇	読む、書く〇〇
					両親は日本人	父日、母ド	T. 浜田の養女
		<u> </u>					両親はドミニカ人

# 3. 収集資料と研究成果発表

2度の海外調査では、インタビューによる一次資料を中心に収集をおこなった。1世が高齢化を迎えて、多くの人が鬼籍にはいっていることから、さらなるデータ収集が必要である。本プロジェクトにもとづく研究成果発表は以下のとおりである。

#### (口頭発表)

- 窪田暁 2012 「ドミニカ共和国における日系人の言語使用に関する予備調査報告」『科学技術研究費基盤研究(B)「<紐帯としての日本語>」調査報告会』、2012年3月、東京外国語大学
- 窪田暁 2013 「ドミニカ人の言語使用と言語意識」国立民族学博物館共同研究会『日本 の移民コミュニティと移民言語』、2013年3月16日、国立民族学博物館。
- 窪田暁 2013 「ドミニカ系移民にとってのスペイン語ー関係構築の資産としての母語」 日本移民学会第 23 回年次大会ラウンドテーブル『移民言語の生かし方―移 民コミュニティにとって』、2013 年 6 月 30 日、武蔵大学

### <参考文献>

1993年 今野敏彦、高橋幸春編『ドミニカ移民は棄民だった』明石書店

2009年 獄釜徹編『青雲の翔―ドミニカ共和国日本人農業移住者 50 年の道』ドミニカ日本人移住 50 周年記念祭執行委員会

# インド調査報告

# デリーにおける日本語学習者の実態に関する予備的調査

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 ジュニア・フェロー 宮本隆史

- 1. 調査日程:7月25日~8月4日、8月12日~8月23日
- 2. 調査対象者:インド人の日本語学習者
- 3. 調査内容 (調査方法を含む): インタビュー調査を行った
- 4. 収集資料:インタビュー記録
- 5. 調査に基づく発表論文・口頭報告:なし

# 調査地としてのデリーの特徴

- ・近代日本の歴史に深く関わる移民・植民が行われて構成された社会としての「日系コミュニティ」は存在しない。
- ・日本人あるいは日系コミュニティに参加するか近い距離に位置する人々としての「日本 語人」と呼びうるグループは、主に日本語の学習者として存在する。
- ・中短期的な日本人滞在者・家族によって構成される社会としての「日本人社会」が出現したのは、1990年代のインドの経済自由化以後、特に21世紀に入ってからのことである。

以上の調査地の特徴から、日本からの滞在者や旅行者との関係の中で、日本語を学習した人々に注目することとした。デリーの日本語学習者は主にふたつのグループに分類できる。ひとつは大学や専門学校などで日本語教育を受けたグループで、もうひとつは旅行者などとの関わりの中でコミュニケーションの必要から日本語を身につけたグループである。本調査では、これらふたつのグループを対象にインタビュー調査を行なった。ただし、短期調査では定量データを得ることは困難であり、あくまでも予備的な調査に留まらざるをえないという限界はあった。

# [教育機関で日本語教育を受けたグループ]

日本語教育を受けた人々としては、デリー大学で日本語を学んだ人々へのインタビューを行なった。

名前	性別	生年	学位	日本語を学習してから の期間	調査時の職業
KU	男性	1984	Advanced Diploma	6年	日系企業の通訳
VT	男性	1988	修士	7年	日系企業の通訳
DK	男性	1986	修士	6年	日系企業の通訳
DT	男性	1990	学士	3年	日系企業の通訳
KD	女性	1981	修士	6年	日系企業の通訳
JP	男性	1974	修士	5年	博士課程(日本研究)

このグループの人々が日本語を習得する誘因は、企業(特に日系企業や日系と現地の合弁会社)で働くためのスキルを身につけるというものであることが多い。インタビューをした中では、研究者を目指す JP 氏以外は、日本語学習の通訳のスキルを身につけることを当初からの目的として挙げていた。

通訳者の職にある人は、いくつかの会社を渡り歩いていることが多く、インタビューを した通訳者はいずれも IT 関連会社と自動車会社で勤務した経験があった。仕事の内容とし ては、IT 関連会社の場合は翻訳(取扱説明書や技術文書など)が多く、自動車会社では通 訳(駐在員と従業員の間の通訳)が多いという傾向がある。

通訳の仕事の場合は、ヒンディー語、英語、日本語が使われることが多い。日本語の理解だけでなく日本人の感情のパターンを理解することが重要であると感じている通訳者が多いという(VT)。会社の種類ごとの特徴としては、自動車会社では生産ラインを止めないことが最重要課題であり、通訳の仕事も社内でのコミュニケーションが主となるため、敬語や謙譲語を使う必要がないという認識がある。他方で、IT 関連会社は、顧客相手のサービス業であるため、敬語・謙譲語の重要性が高いと認識されている(KU)。

こうした仕事のためには、それぞれの会社に専門用語が多くあるため経験が重要であるということが強調されていた。こうした知識は、文学の学習を中心とした、大学での学習では身につきにくいという意見が多かった。また、自動車会社ではITや機械を含め、様々な知識がつくため、最初に一時的に働くには良い就職先だとする人が複数いた(KU、VT、DK、DT)。

一方で、就職に関する情報交換のために、大学の教員や卒業生どうしのつながりが重視されている。企業も大学キャンパスでの採用活動を積極的に行なっている。このグループの人的なネットワークにおいて、大学の日本語教育の場が重要なノードになっているものと推測される。

#### [旅行者などとの関わりの中で日本語を身につけたグループ]

このグループは、正規の日本語教育課程などで学んだわけではなく、日本からの旅行者 との関わりの中で、はなしことばとして日本語を身につけたグループである。デリーのラ ージーブ・チョウク、カロールバーグ、パハールガンジの 3 ヶ所でそれぞれ数度にわたり

インタビューをして回った。

名前	性別	生年	インタビューの場所	調査時の職業
JT	男性	1970	ラージーブ・チョウク	土産物店員
JS	男性	1983	ラージーブ・チョウク	ツアーガイド
GK	男性	1974	ラージーブ・チョウク	不明確
MJ	男性	1980	カロールバーグ	ツアーガイド
NC	男性	1986	カロールバーグ	ツアーガイド
PS	男性	1981	カロールバーグ	旅行会社員
KC	男性	1978	カロールバーグ	ジュース店員
MJ	男性	1973	パハールガンジ	リキシャ運転手
ВН	男性	1968	パハールガンジ	土産物店員
JB	男性	1989	パハールガンジ	ホテル従業員
BE	男性	1965	パハールガンジ	飲食店員
LB	男性	1982	パハールガンジ	不明確

このグループの人々は、ひらがなをかろうじて読むことができる人物 (PS) がひとりいたのみで、基本的に日本語の読み書きはできなかった。いずれも、旅行者との意思疎通をはかるうちに、徐々に日本語の会話能力を身につけた人々であった。

「日本語で話したら(日本人旅行者が)安心する」(NC)、「日本人は英語が話せないひとたくさんだから、(自分が)日本語で話すとビジネス(に)なる」(BH)といった認識が広くみられる。商売のために有利であるから、交渉をしているうちに日本語能力が身についた人が多いようである。また、「日本語話せると(日本人の)彼女できる」(JB)といった声もあり、異性の旅行者との関係をつくるのに有利という認識も散見された。

1990年代までは、バックパッカー向けの宿泊施設が多いパハールガンジでは、数週間ほどの比較的長期で滞在する旅行者もおり、「一日中いっしょにいる」ことで日本語を学んだというケースも多かったという証言もあった(BE)。しかし、2000年代に入ってからは、短期滞在者が多くなり、かつてのように一人の旅行者とゆっくり交流することで学ぶ機会は減少しているとのことである。

# [まとめ]

デリーで日本語が人々を紐帯しているといえる場は、日系企業および教育機関の周辺と、日本人旅行者と旅行者相手の仕事をする人々の間に主として見られる。しかし、移民・植民の結果としての日系コミュニティは存在せず、企業の駐在員のような人々からなる「日本人社会」が大きくなってきたのもごく最近(10年ほど)のことである。そのため、日本語が人々を紐帯しうる場は、今のところ中短期の日本人滞在者と現地コミュニティの接触する領域に限られると考えられる。ただし、1990年代よりインドは経済的に成長傾向が続いており、一方で日本からインドに渡ってビジネスを展開する若い個人も増えているため、今後新たな展開を見ることができる可能性はある。

〈紐帯としての日本語〉

2011-2013 年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)) 研究成果報告書
〈紐帯としての日本語〉日本人社会、日系コミュニティ、「日本語人」の生活言語誌研究
Research Result of Scientific Research Fund on "Japanese Language as a Bond in the Overseas: A Study for Linguistic Life of Japanese Community, Japanese Descent Community, Nihongo-jin Community"

[課題番号:23310176]

発行 2014年3月31日

研究代表者·編集 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 野本京子 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 野本研究室

TEL 042-330-5363

印刷・製本 株式会社アトミ

〒187-0031 東京都小平市小川東町 5-13-22

TEL 042-345-1155 FAX 042-343-3517